

宇宙の迷子

海野十三

青空文庫

ゆかいな時代

このゆかいな探険たんけんは、千九百七十何年だかにはじめられた。いいですか。

探険家はだれかという、川上一郎君、すなわちポコちゃん、山ノ井やま万造まんぞう君、すなわち千せんちやんと、この二人の少年だった。

川上君は、顔がまるく、ほつぺたがゴムまりのようにふくらみ、目がとてもちいさくて、鼻がとびだしている、まめタヌキのように、とてもあいきよのある顔の少年だ。タヌキはポンポポンであるから、それをりやくして川上君のことを友だちはポコちゃんとよんでいる。とてもものきな、にぎやかな子どもだ。

山ノ井君のほうは、顔が丸くなく、上下にのびていて、頭は大きく、あごの先がとがっていて、どこかヘチマに似にている。ヘチマ君とよばないで、ヘチマの子せんを千とよみ、千ちやんとよばれているが、それは山ノ井君はなかなか勉強がよくでき、友だちにしんせつで、級長をしているくらいだから、ヘチマとはよばないのだった。

この二人はたいへん仲がよくて、いつも二人つながってあるいたり、あそんだり勉強したりしている。だからこの二人が組んで、探険に出かけるのはもつとものことだ。

探険——などというところ、むかしはたいへん大じかけな、お金のうんといふ事業のようにいわれたものだ。そのくせ探険のもくてき地はアフリカの密林の中とか、北極とかで、みんなこのせまい地球の上にある場所にすぎなかった。いまはそうではなく、探険といえば、たいへい地球の外にとびだしていくのだ。年号が千九百七十年代にはいると、世界中の人々がこの宇宙探険熱にとりつかれ、われもわれもと探険に出かけるようになった。探険がかんたんにできるようになったわけは、もちろん原子力エンジンが完成したせいである。

原子力エンジンは、小型のものでも、何億馬力の力をだす。その原料はすこしでよい。昔はガソリンや石炭をつかっていたが、あんなものはうんとたいへいでも、いくら力も出やしない。原子力エンジンが世の中に出るようになってから、ガソリンも石炭もただみたいにやすくなつたが、それは原子力エンジンにくらべると、たいへん能率のわるいエネルギーみなもとの源だからである。

さて、わがポコちゃんと千ちゃんをここへつれてきて二人の話をきくことにしよう。

「もう知れちまつたのですか。早いねえ。ええそうです。ぼくとポコちゃんとの二人で、

この夏やすみの二カ月間を利用して、ちよつと月の世界を探険してこようと思うんです」
そういったのは、千ちゃんだった。

「ほんとうはぼくは火星までいつてみたいんだけどねえ。こんどは日数がたりないので、だめさ」

ポコちゃんは、小さい目をしばたいてそういった。

「月の世界にこれまでいったことがあるんですかと、きいてみた。」

「いいや、こんどが、はじめてです」

「どんなものを目的に探険するのですか。貴重な鉱石かなんかをさがしにいくんでしょう」
「そうじゃないんです。ぼくは、月がなぜあんなに冷えてしまったかということをしらべたいと思うんです」

千ちゃんは、そういつてから、かたわらのポコちゃんのほうをゆびさして、

「しかしポコちゃんは、ぼくとちがった、べつな目的で探険するといっています」

「ポコちゃんの探険目的はなんですか」

「ぼくはね、ちよつとたいへんなんだよ。月の世界へいつて、生物をさがすんだよ」

ポコちゃんは肩をそびやかした。

「生物をさがす？ だって月には生物がないんでしょ。月は冷えきっているし、空気も水もないから、生物がいきいてられないわけですね」

「それがね、ぼくは問題だと思うんだ。ほんとうに生物がないかどうか、じつさい月の世界へいってよく探してみないことには、はつきりしたことはいえぬ。それにね、ぼくは前から、月の世界には生物がいるにちがいないと推理をたてているんだ」

「へえ、ポコちゃんだけですね、月の世界には生物がいるなどと考えているのは……。もつとも大昔は、月の中にウサギがすんでいて、もちをついているという話があったが、あれは伝説にすぎないですね」

「ぼくはそのウサギのことをいつているのじゃない。もつとすごいやつがいやしないかと思う。それで、むこうへいったら、どんどん地面を掘りさげて、月の生物をさがしてみるつもりなのさ」

ポコちゃんのきばつな話は、そのへんでやめてもらい、もう一つきいてみた。

「こんどの探検では大宇宙をとぶわけですが、航空中になんきをするような所はありませんか」

「やっぱりいちばんくるしいのは、重力平衡圏じゅうりよくへいこうけんを通りぬけるときでしょうね。もしぼくたちの宇宙艇の力がたりなくなったり、エンジンの故障になると、宇宙艇は前へも後へも進むことができなくなり、永遠にその宇宙の墓場はかばにつながれてしまうでしょう。ぼくはしんぱいしています」

「なあに、だいじょうぶさ。故障さえおこななければ、すうすうと通っちゃまうさ。今からしんぱいしてもしかたがない。そこへいつて、いっしょうけんめいやればうまくいくよ」

「だがね、ポコちゃん。重力平衡圏というものはもっとおそろしい場所だと思うよ。北極や南極の近くには、氷山が、ぶかぶか浮いていて、船に衝突してしずめてしまよ。あの重力平衡圏には、おそろしくでつかい宇宙塵うちゅうじんがごろごろして、ぼくたちの宇宙艇がそれにぶつかろうものなら、たちまちこなごなになってしまふと思うよ。だからそのへんを宇宙の墓場といつてみんなおそれているんだ」

「なあに、そこへ近づいたら、ぼくがうまく宇宙艇を操縦して宇宙の墓場を安全に通してあげるよ。千ちゃん、きみみたいに前からしんぱいばかりしていたら、ますますきみの顔が青くなってへち……いや、ごほん、ごほん」

「なんだって。へちがどうしたって。その下にもう一字くつつけたいんだろう」

「マあいいや。ごほん、ごほん」

「あつ、とうとういったな、こいつ……」

カモシカ号出発

二人ののりこんだ宇宙艇カモシカ号は、ついに地球をけって、大空へ向けてとびあがった。

時刻は午前五時十五分。場所は東京新星空港だ。

すばらしいカモシカ号の雄姿！

流線型の頭をもった艇の主体。そのまんなかあたりから、長くうしろへむけてひろがっているこうもりのような翼が三枚。艇のぜんたいは螢光色にぬられていて、目がさめるほどうつくしい。尾部からと、翼端からと、黄いろをおびたガスが、滝のようにふきだし、うしろにきれいな縞目の雲をひいている。そしてぐんぐん空高くまいあがっていく。

そのカモシカ号の艇の内部をのぞいてみよう。

(テレビジョンじかけで、艇のもようは、たえず地上へ向けて放送されている)。

艇のまるい頭部の中に、二つならんだ操縦席がある。右の席にはポコちゃんが、左の席には千ちゃんが腰をふかくうずめている。

操縦席と計器盤と自動式操縦ボタンとが、鋼鉄製の大きなかごのようなものの中にとりつけられている。そのかごは、外側に二本の軸がとびだし、それがかごとりまく大きいじょうぶな輪わの軸受けあなへはいつている。その輪には、おなじような二本の軸がとびだし、かごの軸と九十度ちがった方角へでていて、それが外側にあるもう一つの大きなじょうぶな輪の軸受けあなへはいつている。そしていちばん外側の輪は、しっかりと艇のかべにとりつけられている。

つまり、昔からあるらしん儀ぎのとりつけかたとおなじである。そのとりつけかたをするど、船がどんなにかたむいても、らしん儀の表だけはちゃんと水平にたもたれるのだ。――カモシカ号の操縦者とともに、いつも重力の方向にじつとしていて、横にかたむいたり、さかさになったりしないようにたくみに設計されているのであった。

だから宇宙艇カモシカ号がまっすぐに上昇しようと、水平方向にとぼうと、あるいはま

た宙がえりをしようと、操縦席はいつも直立不動で、操縦席にいる人間は家の中でいすに腰をかけてじっとしているのと同じことであって、たいへんらくである。

そのかわり宇宙艇の頭は、すきとおったあつい有機ガラスと、じょうぶな鋼鉄のわくとをくみあわせて、半球形はんきゆうけいになっていて、操縦席がどっちへむこうとも、いつでも艇の外が見られるようになっていいる。

艇は、垂すいちよく直ちよくに上昇をつづけている。

太陽の光りはあかるく円屋根まるやねの左の窓からさしこんでいる。

高度は、今しがた七千メートルを高度計のめもりがしめした。

下界げかいは、はばのひろい濃いみどり色のもうせんをしいたように見え、そのもうせんの両側にガラスのような色を見せているのは海にちがいない。まるで白い綿をちぎったような小さな雲のきれが、艇と下界のあいだに浮いて、じっと、うごかないように見える。

「千ちゃん、たいくつだね。下界のラジオでもかけようか」

「うん。どこか軽快な音楽をやっている局をつかまえてくれよ」

「ああ、さんせいだね」

ポコちゃんが短波ラジオのダイヤルをぐるぐるまわしていると、アメリカのラジオ・シ

チーの明かるい放送がはいつてきた。

二人がそれにききいつているうちに、高度はどんどんあがっていく。そして空がだんだん暗さをまます。

やがて星がきらきらかがやきはじめる。

「ポコちゃん、いつのまにかほくたちは成層圏せいそうけんへたつしたよ。ほら、空が暗くなってまるで夕方になったようだ」

千ちゃんが指をてんじようの方へむけていう。が、ポコちゃん、へんじをしない。それもそのはず、ポコちゃんは音楽をききながらいい気もちになってねむってしまったのだ。

「おやおや、のんきな坊やだなあ」

そういつているとき、へんなこえが頭の上にした。

「もしもしカモシカ号。もしもしカモシカ号……」

あ、下界からの超短波の無線電話のよびだした。

「ああ、こちらはカモシカ号です。山ノ井万造です。あなたはどなたですか」

「おお、カモシカ号ですね。ぶじですか。みんなしんぱいしていたところですよ。こっちは

東京放送局の中継室ですが……」

「ぼくたちは元気です。しんぱいはいらんです」

「でもね、さつきから——そうです、四十分ほど前からこっちへずつとカモシカ号からのテレビジョンがとまっているのです。だからカモシカ号は空中分解でもしたんじゃないかと、しんぱいしていたわけです。だから超短波の無電でちよつとよびだしをかけたんです」
「こつちからのテレビジョンがとまっていますって。それは知らなかった。そんなはずはないんですがね。念のためにちよつとしらべますから、待っていてください」

千ちゃんはふしぎに思つて、テレビジョンの空中線回路へ監視燈かんしとうをつつこんで見ると、燈あかりがつかない。なるほど電流が通つていない。やつぱりそうだったんだ。故障の箇所かしょはどこだろうかと、千ちゃんは座席から立ちあがってはしごで下へおり、テレビジョン装置をしらべてみた。しかしアイコノスコープも発振器はつしんきもどこもわるくなさそうである。しかしテレビジョン電流はさつぱり出ないのだ。

いよいよこれはへんである。千ちゃんはふたたびはしごをのぼつて操縦席へもどつてきた。このうちは、いい気持のポコちゃんをねむりからさまして、二人して故障箇所を早くさがそうと考え、となりの席で、ていねいに、おじぎをしたようなかっこうでいねむつているポコちゃんの肩へ手をかけようとしたとき、故障の原因がたちまちはつきりわかつて

しまった。

「なあんだ。ポコちゃんが、自分のおでこで、テレビジョンのボタン・スイッチをおして
“テレビ休^{きゆうし}止”にしているじゃないか。困った坊やだ。おいポコちゃん、ポコちゃん。
そうしていちやこまるじゃないか」

と、千ちゃんはポコちゃんの肩をもつて、自動式操縦ボタンのパネル（盤）からひきは
なした。しかしポコちゃんは、まだ目がさめないで、座席に深くおちこんだようなかつこ
うで、むにやむにや、ぐうぐうぐう。

千ちゃんをあきれながら“テレビ動作”のボタンをおす。するとテレビジョンはすぐさ
ま働きました。

「ああ、もしもカモシカ号。そっちから送っているテレビジョンが受かるようになりま
した。ありがとう、ありがとう」

下界の放送局のこえである。

「いや、どういたしました。ぼくの顔が見えていますか」

「ああ、よく見えます。笑いましたね、いま。あなたは山ノ井君ですね」

「そうです、山ノ井です」

「もう一人の川上一郎君は健在けんざいですか」

「はあ、健在です」

「では、川上君にちよつとテレビへ出てもらつて、何かしゃべつてもらつてくれませんか」
「はいはい。しようちしました」

千ちゃんはそうこたえて、テレビジョンの送影そうえいぐち口をポコちゃんの方へむけて大うつしにして、

「おいおい、ポコちゃん。放送局のおじさんが、君になにかしゃべれつてさ」

と、肩をゆすぶつて起しにかかる。

「……うん、むにやむにやむにや……。もうおイモはたくさんだよ。ナンキンマメがいい。あ、そのナンキンマメ、まつてくれ。むにやむにや……」

と、ポコちゃんは、ねごとをいう。

「はははは、これはゆかいだ」

と、放送局のアナウンサーは笑つて、

「では、もう時間がきましたから、このへんできよならします。次の連絡時間は十時かつきりということにねがいます。エヌ・エイチ・ケー」

飛ぶ火の玉

ポコちゃんがしぜんに、ねむりからさめたときには、艇の外はもうまっくらであつた。

「あつ、あああーッ。いい気もちでねむつた。——おやおや、もう日がくれたぞ。早いものだ。さつき朝だと思つたのに……」

そういうポコちゃんの横の席では、千ちゃんがしきりに日記をつけている。

「あ、千ちゃんがいたよ」

と、ポコちゃんはずまらないことを感心して、

「千ちゃん、今何時だい」

「今、十時三十分だ」

「十時三十分？　午後十時半かい」

「ちがうよ。午前十時三十分だよ」

「へんだね、それは……だって、外はまっくらで、星がきらきらかがやいているぜ。ま夜中の景色だよ、これは……」

「おい、しつかりしてくれ、ポコ君、いつまでねぼけているんだよ」

「ねぼけているって、このぼくがかい。ぼくがどうしてねぼけるもんか。千ちゃんこそねぼけているぞ。ぼくはねぼけてなぞいないから、たとえば、この高度計でもさ、はつきり読めるんだ。……おやおやおや」

ポコちゃんは目をこすつたり高度計のガラスぶたをなでたり。

「へえ、ほんとうかなあ、高度二万五千メートルだって……。すると成層圏のまん中あたりの高度だ……。そのあたりなら、大気がうすくて、水蒸気もないし、ごみもないから、太陽の光線が乱反射らんはんしやしない。それで昼間でも成層圏の中は暗い。ことに高度二万三千メートル以上となれば空は黒灰色こくかいしよくにみえるのである……と、『宇宙地理学』の教科書に書いてあったが、ははん、なるほどだ……」

ねぼけていたとはいえ、もう夜中だ、などとばかなことをいったものだ。千ちゃんはそれに気がついたかなあ——と、ポコちゃんは、タヌキのやぶにらみという、みょうな目つきをして、となりの席の千ちゃんの方をうかがった。すると千ちゃんはまっすぐ顔をポコ

ちやんの方へ向けてにやにや笑っていた。

「あははは」

「わっはっはっはっ」

二人は笑いあつた。それぞれがあつた笑いの原因によつて笑つた。

カモシカ号の速度はかねて計算しておいたとおり、しだいにはやくなつていった。

地上からいきなり早い速度で飛びだすことはきけんである。のっている人間は気がとおくなつたり、ひどければ死ぬであらう。

しかし地上を出るときは、わりあいゆつくりした速度でとびだし、それからだんだん速度をたかめていくと、のっている人間にはきけんをおよぼさないで、かなりたかい速度にすることができると。つまり人間のからだにこたえるのは、速度そのものではなく、速度のかわりかた——つまり加速度が、あるあたり以上になると、きけんをおこすのである。

着陸のときにも同じことであるが、着陸の場合は、速度のへりかたが問題になる。

なにしろカモシカ号としては、二カ月間に地球と月の間を往復し、そして月の世界を見物する日数も、この中にみこんでおかねばならないので、たいへん日がきゆうくつだ。したがつて、地球と月の距離四千二百万キロメートルの往復を二十日ぐらいでやつてしま

たい。そのためには、宇宙艇カモシカ号は、すくなくとも時速二十四五万キロメートルの、^{トップ・スピード}最大速度をださねばならない。

ガソリンのエンジンや、火薬利用のロケットを使ったのでは、今まではとてもこんなすごい速度はだせないが、原子力エンジンの完成された今日では、これだけの最大速度をだすことはよいである。人間が原子力を利用することができるようになったおかげで、それまでは、全く不可能とされていた、北氷洋とインド洋をつなぐ、大運河工事もできるようになり、また、^{とさおきかいてい}土佐沖海底都のような大土木工事が成功し、それから地球外の宇宙旅行さえどんどんやれるようになったのだ。すばらしい原子力時代ではないか。じっさい二少年は、らかな気もちで、こうして宇宙を飛んでいるのだ。

地上からはかった高度五万五千メートルあたりが、成層圏のおわりである。

そこを通りこすと、大気はいよいよすくなくて、地上の大気の四千分の一ぐらいとなる。もちろん艇の中では、たえず酸素をだす一方、空気をきれいにし、炭酸ガスをとっている。艇は気密室で、空気が外にもれないようにつくつてあるが、このあたりまでくると、^{たいきあつ}外の大気圧が低いからどこからともなく艇内の空気が外へぬけだす。だから艇中で酸素などをたえずおぎなつてやらなければならぬ。

ガンガンガン。

ガガン、ガガガガン。

とつぜん、どえらい音をたてて、艇がゆれた。

音がしたのは、操縦席よりずっと後方にあたる艇の胴中へんと思われる。

「何だろう、千ちゃん」

ポコちゃんは、小さい目をせいっぱいひろげて、千ちゃんの腕をつかんだ。

「さあ、何だろう」

千ちゃんにも、けんとうがつかない。

が、音もしんどうもそのままおさまったし、計器盤を見わたしても、べつに異常はなさそうである。

ガンガンガン。

ガガン、ガガガガン。

とつぜん、またもやひどい音がして、艇がきみわるくふるえた。

「あつ、また起った」

「へんだね、どうも」

「気持ちが変わるいね。きつとこのカモシカ号は空中分解するんだよ。ちと早すぎらあ」

「……」

千ちゃんはポコちゃんにはこたえず、顔を前へつきだして、ガラス窓ごしに外をすかして見ていたが、このとき、さつと顔をかたくすると、

「ポコちゃん、あれを見ろ。外を見るんだ」

とさけんで右手で外を指さしたが、その手をただちにパネルへもどして、操縦席にあかあかについていた電燈を消した。

たちまち二人のまわりはまつくら。

千ちゃんはなぜ電燈を消したのだろうと思いつながら、ポコちゃんは艇外へ目をやった。

外は墨すみをぼかしたようなまつくらな空。銀河が美しい。

と、とつぜん、上の方からすぐ目の前におりてきた大きな赤い火の玉！

みるみるうちにその火の玉は、まぶしいばかりにもえあがって下界の方へ。

ガガガンの音はそのとき起った。

「何だろうね、今のは……」

ポコちゃんは、青くなつてさけんだ。

「いん石がもえながら飛んでいるんだ」
くらやみの中に千ちゃんのこえがひびいた。

危機脱出

「へえっ、あれが、いん石かい。すごいなあ」

あまりものにおどろいたことのないポコちゃん川上少年も、艇外をひゆうひゆうとどびかう鬼火のような、いん石群には、すっかりきもつ玉をうばわれた形であった。

そのとき操縦当番の千ちゃん山ノ井少年は、ポコちゃんに答えようともせず、前のテレビジョンの映写幕面をにらみながら、汗をながして操縦かんをあやつっている。

「しかし、きれいなもんだなあ。両^{りようこく}国の川^{かわびらき}開で大花火を見るよりはもつとすごいや。あつ、また一発、どすんとぶつかつたな。いたい！」

ポコちゃんは金属わくにいやというほど頭をぶつつけた。それっきり、かれはおしやべ

りをやめた。それはしゃべっているさいちゆうにどすんときて、じぶんの舌をかみそうで、心配になったからだ。

艇内はしばらくしずまりかえっていた。ただ聞えるのは、艇の後部ではたらいっている原子力エンジンの爆発音の、にぶいひびきだけだった。

そういう状態が十五分ほどつづいたあとで、山ノ井はスイッチを自動操縦の方へ切りかえて、操縦かんから手をはなした。そしてほっと大きな息をついて、となりの川上の方へ顔を向けた。

「ポコちゃん。ようやく流星群りゆうせいぐんを通りぬけたらしい。もう、だいじょうぶだろう」

「だいじょうぶかい。いん石があんな大きな火のかたまりだとは思わなかった。こわかったねえ」

「まったくこわかった。下界から空を見上げたところでは、流星なんか大したものに見えないけれど、今みたいにすぐそばを通られると、急行列車が五六本、一度にこちらへとんでくるような気がして、ひやつとしたよ」

そういつている山ノ井のひたいから、汗のつぶがぼたぼたと流れおちた。

原子力エンジンは、この宇宙艇で地球から月の世界をらくにおうふくさせてくれる。そ

れがわかっていたから、二少年はカモシカ号に乗って地上をとびだしたわけである。しかしそれはかるはずみであったと、今になって気がついた。やはり本職の宇宙旅行案内人やとつていつしよにこのカモシカ号に乗組んでもらうのがよかった。二少年のたのみの綱つなは、ある雑誌の増刊ぞうかんで、「月世界探検案内特別号」という本が一冊あるきりだった。

その本によると——地上からの高度六十キロメートルから百三十キロメートルの間の空において、いん石は空気とすれあつて火をだしてとぶ、これすなわち流星である——と、かんとんに書いてあるだけだった。その流星の中には宇宙艇に命中して艇をこなごなにするような大きなものがあることや、それがとんで来たときにどうして艇を安全にすることができるか、などということはちつとも書いてなかった。

だからここまで来たのはいいが、二少年はたいへん心ほそくなってしまった。山ノ井の方はとくに心配をはじめた。

「やあ、あれは何だろう。大きな山が光つてみえるぜ、おい千ちゃん、あれを見な」

川上が急に大きな声をだして、横の、のぞき窓に顔をおしつけて、わめきたてる。

山ノ井は、はつとした。大きな山が光つてみえる。もしそれが大いん石であつて、それに正面からぶつかられると、もうおしまいだ。かれは席からのびあがつて、川上がのぞい

ているとなりに顔をおしつけて、外のようすをうかがった。

うるしを流したようにまつ黒い大空。きらきらとダイヤモンドのように無数の星がきらめいている。ことに大銀河のうつくしきは、目もさめるようだ。その銀河が橋をかけているしたに、川上がさわぎたてる大きな光りの山があった。それは五色の光りのアルプスとでもいいたい。空中の博覧会の大イルミネーションだ。目をすえて見るとその五色の山脈はすこしずつ動いている。

「ああ、きれいだなあ」

山ノ井は思わず嘆たんせい声をはなつた。

「千ちゃん。きれいだななどと、見とれていいのかい。あれは何だい。原子力のたつまきじゃあないのかい」

原子力のたつまきなんて、そんなものがあるかどうか知らないが、川上はそういうものがあつたらさぞおそろしかろうと思つて、そういつたのだ。

「ちがうよ、ポコちゃん。あれはオーロラだ。極きよっこう光ともいうあれだ。そして山形やまがたをしているから、あれは弧こしやう状オーロラだよ」

「オーロラ？ ははあ、なるほどオーロラだ」

川上は、本に出ていた三色版写真のオーロラを思いだした。

「あそこがちょうど北極のま上にあたるんだ。地上からの高度はいくらだったかな」

山ノ井が、れいの増刊のページをぺらぺらとくつて、オーロラの説明の出ているところをだした。

「書いてある。——弧状オーロラは高度百二十キロないし百八十キロの空間に発生する。

また幕状まくじょうオーロラは、さらに高き場所に発生し、その高度は三百キロないし四百キロである——とさ」

「ふうん。ぼくたちはとうとうオーロラの国まで来たんだね。ゆかいだねえ」

しんぼうくらべ

オーロラの国も、いつしか通りぬけて、宇宙旅行の沿道のながめは、いよいよ単調で、たいくつなものとなってきた。

なぜなら、空はどこまでいっても、うるしをとかしたようにまっ黒で、その黒い幕のところどころに針でついたような穴があつて、それがきらきらと光っている大小無数の星で

ある——という風景が、いつまでたつてもつづくのであった。なんのことはない、無限に
ながく夜がつづいていようなものだ。

ただ、ふつうの夜には見られないものが二つあった。

その一つは、まっくらな大空に、よくみがいた丸まるかがみ鏡のような太陽がしずかに動いて
いくことだ。それはふしぎなものだった。ぎらぎらとかがやいている太陽にはかわりがな
いんだが、しかしあたりはまっくらな夜の世界だ。なぜ太陽はあたりの空を明るくしない
のであろうか。いきおいのおとろえた太陽。急に年をとったように見える太陽だった。

しかしこれは、「月世界探検案内」に説明が出ていた。地上で仰ぐ太陽があたりの空を
すっきり明るくしているのは、空中にあるちりや水蒸気の粒などが太陽の光線を乱反射さ
せるためである。ところが空高くのぼれば、ちりはなくなるし、水蒸気はもちろんなくな
り、太陽の光線は一直線にすすむだけで、何にもぶつかるものがない。だからもちろん乱
反射は起らない。したがって、もえている太陽はぎらぎらかがやいても、あたりは明るく
ないのだという。

いくら太陽がえらくても、ちりや水蒸気がなければ、空がまひるの明るさにかがやかな
いのだ。そうしてみると、ちりとか水蒸気は、大した魔術師だわい——とポコちゃんは感

心してしまった。

「だけれど、なんとというあわれなお日さまだろう」

と、ポコちゃんは、窓の外に仰ぐ太陽にたいへん同情をした。

もうひとつのかわった風景は、どんどん後へはなれていくわが地球が、とうとうすっかり球の形に見えるようになったことである。

その地球の大きさを、どういあらわしたらいいだろうか。大きな丸いテントを張って、それをすぐそばに建っているとうの窓から身をのりだして見たようだともいうか、家の二階までがすっぽりはいる大きな雪の玉をこしらえて、そのそばにしゃがんで見上げたようだというか、とにかく大きな球の形に見え、それが太陽の光をうけて明かるくかがやいて見えるのだった。

海と陸との区別がつくことはつくが、それはあまりはつきりしない。陸の色は黄色っぽい緑であるし、海はうす青であった。しかしよく見ているとあそこが太平洋だな、こっちはアジアで、あっちがアメリカだなとわかった。この大きな球である地球が、きれぎれの雲につつまれているところは、なんだかおそろしい気がしたし、またその大きい地球が、ささえるものもないのに落ちもしないのが、ふしぎであり、あぶなっかしく思われて、山

ノ井も、川上も、ながく地球を見ていることができなかつた。

二人が目ざす月の方は、こうしてかなり近づいたのにもかかわらず、海から出た満月ぐらいの大きさになっただけだつた。月の世界につくには、まだなかなかである。

こうして、しんぼうくらべのような日が、いく日もつづいた。

地球からのラジオが、いちばんたのしいものであつたが、それもだんだんと音がよわくなつてきたし、局の数もへつた。こつちのカモシカ号から地球へ送る無線通信もだんだんうまうまなくなつて、やがてモールス符号のほかは、地球へとどかなくなつてしまつた。それでも地球からは、かすかながらも無線電話がカモシカ号のアンテナにとどいた。しかしそれは、とくに大切な連絡のために使われるだけであつて、一日のうちに五分ずつ、たつた三回にすぎなかつた。

しかしその五分間の無線電話によつて、カモシカ号のことが、内地でたいへん人気があることもわかつてうれしかつた。また、金星探険団のマロン博士一行の乗っているロケットが針路をあやまつて大まわりをしたために、いまだに金星につかないで、金星のあとを追いかけて太陽のまわりをぐるぐるまわっているが、このちようしではもう地球へもどれず、博士一行は宇宙で遭難し白骨^{はっこつ}になるのではないか、と心配されている、といういや

な報道もあった。

このカモシカ号が、マロン博士一行みたいな運命におちいつてはたいへんである。二少年は、たいくつの心をふるいおこして、一所けんめい艇のエンジンのちようしをしらべ、そのほか艇が持っているいろいろな装置をしらべて、故障のおこらないようにつとめた。

艇は気密室きみつしつになっていた。気密室とは、空気がもれない部屋のことをいうのだ。もしこの気密がわるくなり、艇内の空気が外へもれはじめると、二少年は呼吸ねんいができなくて死んでしまわなければならない。だから艇が気密になっているかどうかを、念入りにしらべる必要があった。

いよいよ地球から遠くはなれて月に近くなつた結果、重力がうんと減へつた。するとからは、かるだは軽くなるし、鉛筆などをほおりあげても、いつまでも上でふわふわしていて、なかなか下へおちてこないというわけで、まるで魔術師になつたようでおもしろい。

だが、机の上においた本が、いつの間にもやら宙へうかんでいたり、たべようと思つてパイナップルのかんづめをあげると、たちまち中から輪切りわぎになつたパイナップルや、おつゆがとびだしてきて、宙をにげまわるなどと、いうこともあつて、なかなかこずる。本や、かんづめはまだいいが、エンジンのちようしがくるつたり、燃料が下からたつまきみ

たいになつて操縦席までのぼつてきたり、どの部屋もごつたがえしの油だらけになる。これでは困るから、人工重力装置を働かせて、この艇内の尾部びぶの方に向けて、万有引力と同じくらいの人工重力が物をひっぱるようにする。この人工重力装置が働いているあいだは、机の上の本も机の上からにげださないし、輪切りのパイナップルも、ふたのないかんの中におとなしくおさまっている。

急行列車で地上を走ったり、飛行機で太平洋横断の旅をするのとはちがい、宇宙旅行をするにはこのようにかつてのちがったことがいくつもあつて、たいへんやつかいであるが、そこがまた、たいへんおもしろいところでもある。

宇宙の墓場はかばだ

「おいポコちゃん。いよいよきたぞ、宇宙の墓場へ。このへんは、もう宇宙の墓場なんだぜ」

山ノ井は、となりの席でもう三時間もぐうぐうねむりつづけている川上を起した。

「うううーん。ああ、ねむいねむい。なんだ、もう食事の時間か」

「あきれた坊やだね。宇宙の墓場だよ」

「シチュウが袴はかまをはいたつて。そいつはたべられないや、口の中でごわごわして……。ああ、ああつ。腹がへった」

ポコちゃんは目がさめると、おなががすいたときわぎだすくせがあつた。山ノ井の千ちゃん、あきれてしまって、とちゅうからもうだまっていることにして、しきりに暗視あんしテレビジョンのちようしをかえながら艇外へするどい注意力をあつめている。

ああ、宇宙の墓場。

そこは重力平衡じゆうりよくへいこうけん圏けんというのが、ほんとうであろう。つまり地球からの引力と月からの引力がちようどつりあつていて、引力がまったくなくないように感ぜられる場所なのだ。そこは、もちろん地球と月の中間にある。そこから月までの距離を一とすると、そこから地球までの距離は九ぐらいになる。だから月にたいへん近い。

この重力平衡圏は地球と月との間に、かべのように立っているのだ。しかしそれは平たいらなかべではなく、まがつている。

そこへ流れこんだ物は、宙ぶらりんになってしまって、地球の方へも落ちなければ月の方へも落ちない。そしていつまでも宙ぶらりんの状態がつづく。だから宇宙の墓場といわれる。

それに、大昔からこの重力平衡圏へ流れこんで、宙ぶらりんになっている物が少なくなっている。だからいよいよそれは宇宙の墓場らしく見えてくるのであった。山ノ井は、どんなものが宙ぶらりんになっているかと、目をさらのようにしてテレビの幕^{まくめん}面をのぞいている。

すると、一つだけ、見えた。

「なんだろう、あそこにある細長いものは……。いん石にしては長すぎるし、それにいやに形がいいし、へんだなあ」

山ノ井がひとりごとをいったのを、川上のポコちゃんが聞きつけて、なんだ、なんだとそばへよってきた。

「へえっ、とうとう宇宙の墓場へやってきたのかい。それはたいへんだ」
ポコちゃんは、小さい目を鉛筆のおしりのように丸くしておどろいた。

「えッ。そして何が見えるって。何が見えているんだろうと、いうのかい。きまっている

よ、それはうれしいだよ」

「なに、うれしい？」

「そうさ、うれしいにちがいないよ。だって墓場から出てくるのはうれしいにきまつているじゃないか」

「あんなことをいつているよ。あんなうれしいがあるものか。よく見てごらんよ」

千ちゃんにいわれて、ポコちゃんがよく見ると、なるほどうれしいにしてはどうも形がへんである。だいぶん近づいたので、よく見えるようになったが、胴のところに四角な窓がある。ポコちゃんは首をひねった。

「なるほど、四角な窓がついているうれしいなんて、へんだね。……ああつ、そうか。おい千ちゃん、たいへんだよ。あれはだれかの宇宙艇だよ。遭難したらしいね。早く助けてやらなくては……」

ほんとうだった。それは宇宙旅行中に遭難した宇宙艇にちがいなかった。近づくにしたがつて、その宇宙艇の胴にかいてある「新コロンブス号——アルゼンチン」という艇の名前が読みとれた。

「ああ、新コロンブス号じゃないか。今から三年前にアルゼンチンの探険家ロゴス氏が乗

つてとびだした新コロンブス号じゃないか」

「ああ、そうか。ふうん、すると三年前から、あのとおりにお墓になってしまったんだよ。乗組員はどうしたろう。千ちゃん、すこしスピードをゆるめて、そばへいってやろうじゃないか」

「うん、そうしよう。しかしちよつと危険だぞ。うっかりするとこつちも墓場の仲間入りをするおそれがある」

カモシカ号は、いくらか速度をゆるめ、新コロンブス号の方へ近づいていった。

すると、望遠テレビで、しきりに焦点を新コロンブス号に合わせていた川上が、「あつとさけんで、あおくなつた。」

「どうした、ポコちゃん」

「た、たいへんだ。新コロンブス号はがい骨に占領されているよ。あの窓をよく見てごらんよ。どの窓にも、がい骨がすずなりになって、こつちを見ているよ」

「えっ、そうか。気持のわるいことだなあ」

山ノ井も望遠テレビをのぞきこんだ。かれは首すじがぞつと寒くなるのをおぼえた。

すずなりのがい骨！ それはみんな乗組員のなきがらにちがいがいなかった。なんとという気

のどくなことであろう。宇宙探険の先駆者せんくしゃのはらった、とおといぎせいである。

「敬礼をしよう」

「ロゴスさん、ばんざい」

そのとき二人の少年は、ほとんど同時に、難破した新コロンプス号の一つの窓に何か字をしたためた一枚の紙がはりついているのを発見した。そしてそのうしろに、りっぱな艇長の服をきいているがい骨が立っていて、

「お前たち、早くこれを読めよ」といつているようであった。どうやらそれはロゴス氏のがい骨らしい。

がい骨がまもっているその一枚の紙にはたしてどんなことが書いてあったろうか。

がいこつの警告

がいこつ艇長が、こつちを向いて、紙に書いたものを「ぜひ、これを読め」というよう

に、こつちへ見せているのだ。

山ノ井も川上も艇長服を着たがいこつには、びっくりして顔色をかえたが、わけのありそうながいこつ艇長のようすに、こわいのをがまんして、紙きれに書いてある文句をひろって読んだ。

それは、つぎのような文章であった。

——ここは宇宙の墓場だ。けっして乗物のエンジンをとめるな。エンジンが動かなくなるとわが新コロンプス号と同じ運命になろう。それからもう一つ、時々ここをつきぬける、すい星があるから注意せよ。

新コロンプス号艇長ロゴス——

山ノ井と川上とは顔を見あわせた。

「やっぱり探険家のロゴス先生だったね」

「そうだ。ロゴス先生は、がいこつになってもあとから来る者のために、とおとい警告をしてくれている。えらい人だね」

そういつているうちに、動いているこつちのカモシカ号は、どんどん新コロンプス号か

ら、はなれていった。二人は、それをじっと見送りながら、宇宙探険の英雄の霊れいのために、いのった。

しばらくは二人ともだまっていた。がいこつ艇長にめぐりあつたことが、ひどく胸をいためたからだつた。

そのうちに川上が声をだした。

「ねえ、千ちゃん、いったいこの重力平衡圏というところは、どんなところだろうね。もちろん地球の方へ引く重力と、月の方へひっぱる重力とが、ちょうどつりあつていて、重力がないのと同じことだとはわかっているが……」

ポコちゃんの川上は、小さい目をくりくり動かして、そういった。

「それだけわかつていれば、それでいいじゃないか」

「いや、しかし、それは、りくつがわかっているだけのことだ。じっさいぼくたちが、その重力平衡圏へ出てみたら、いったいどうなるんだろうねえ」

「さあ、それは……それはぼくたちのからだは、ふわりとちゆうに浮いたままで、下に落ちもせず、横に流されもせず、からだは鳥のように軽く感ずるのだと思うよ」

「へえつ、ふわりとちゆうに浮いたままで、下に落ちもせず、横に流されもせず、鳥のよ

うに身が軽くなるんだって。それはゆかいだな。千ちゃん、ちよつと、それをやってみようじゃないか」

「やってみるって、どうするの」

「だからさ、つまりこのカモシカ号から外へ出て、ちゆうに浮いてみたいのさ。ちゆうに浮いた感じは、どんなだろうね。ぼくは前から、そういうことをしてみたかったのさ。天国にいるつばさのはえた天使ね、あの天使なんか、いつもそうして暮しているんだから、ぼくはうらやましくてしかたがなかったんだ。ねえ千ちゃん、ちよつと外へ出てみようじゃないか」

ポコちゃんは、ちゆうに浮いてみたくてたまらないらしい。しきりに千ちゃんにすすめる。

「いや、ぼくは出ないよ」

「ぼくは一度出してみる。では、ちよつとしっけい——」

「あつ、待った。ドアをあけて外へとび出してどうするのさ」

「どうするって、今いったじゃないか。ちよつと、ちゆうに浮いてみる……」

「だめ、だめ、そのままでは……。だいいち、外には空気はすこしもないぜ、そのままと

び出せば、とたんに呼吸ができないから死んでしまうよ」

「あつ、そうだったね」

「それから、外は寒いし、気圧はゼロなんだから、そのままでは、からだは大きくふくれて、しかもこおってしまうよ。つまり全身ぜんしんしもやけになった氷人間になっちゃうよ。もちろん、たちまち君は死んじゃう」

「おどかしちゃ、いやだよ」

「だって、ほんとうなんだもの。だから外へ出るなら空気服を着て出ることだ。空気服を着ていれば、中に空気があるから呼吸はできるし、服は金属製のよろいのように強いから、圧力にも耐たえるし、また服の内がわは電熱であたためるようになっていいるから、からだがいになる心配もない」

「ああ、それだ、空気服を着ることだ。そのことを早くいつてくれればいいんだ。それをいわずに、ぼくをおどかさから、千ちゃんは、ひとがわるいよ」

そこでポコちゃんは、千ちゃんに手つだつてもらって、空気服を着、頭には大きな球きゆう型の空気帽をかぶり、すっかり身じたくをしてから、とうとう艇の外に出た。

艇から外へ出る出入口は、このカモシカ号の胴どうのまん中あたり、それは小さい気密室が

三つ、つづいていて、三つのドアがあった。いちいち、その小さい室へはいつてはドアをしめ、だんだん外へ出ていくのであった。こうしないと、ドアをあけたとたんに、艇内の空気は、いつぺんに外へすいだされ、艇内は空気がなくなってしまう。それでは中にいる者は死んでしまうのだ。

大事件

ポコちゃんは、艇の外へ出たものの、しばらくは艇につかまって、手をはなそうとはしなかった。ここは重力平衡圏だというものの、手をはなしたが最後、自分のからだは、すうっと下へ落ちていくのではないかと、やっぱり心配だったからである。

「おい、ポコちゃん、なにを考えているんだ」

艇内からは、千ちゃんが無線電話でポコちゃんに話しかけた。無線電話器は、空気服のせなかに取りつけてあり、送話器と受話器の線は、服の内がわを通って、ポコちゃんの口

と耳のところへいつている。

「いま、手をはなすところだ」

ポコちゃんの声はすこしふるえている。

カモシカ号の電燈が外を照らしているので、その光りのあたるところだけは、はつきり見える。

「千ちゃん、いよいよぼくは手をはなすよ。もし、ぼくのからだがついらくをはじめたら、すぐ助けてくれよね」

日ごろのポコちゃんに似あわず、心ぼそいことをいう。さすがのポコちゃんも、自分の冒険がすぎたことを、いま後悔こうかいしているらしい。

「早くやれよ」

千ちゃんは、艇内から、えんりよなくさいそくをする。

「では、はなすよ」

ポコちゃんは、もうあきらめて、手をはなした。と、かれのからだは、カモシカ号の胴の上をつるつるとすべって、うしろの方へ……。

それから翼よくと翼とのあいだをすりりとすりぬけたと思ったとたんに、かれのからだは艇

をはなれた。と、かれのからだは平均をうしなつて、くるくると風車のようにまわり出した。

「うわっ、わわわわっ！」

でんぐりかえること何十回か何百回か、わからない。目がくるくるまわる。頭のしんが、つうんと痛くなる。はき気がする。

そんな大苦しみのすえに、ようやくからだの回転がゆるくなつて、ポコちゃんは人ごちにもどつた。——その時、自分のからだだが、まぶしく照らされているのに気がついた。千ちゃんがカモシカ号から探照燈たんしょうとうをあげせかけていてくれるのだった。

そのうちに、ポコちゃんのからだは、しずかにとまった。急にからだが軽くなった。やれありがたいと、ポコちゃんはうれしくなつて、あたりを見まわした。

「ほ、ほんとうだ。ぼくのからだは、ちゆうに浮いている！」

自分のからだをぐるっと見まわしたが、手足も胴も頭も、何にもふれていない。たしかに、空間に浮いているのだった。

ポコちゃんは、そこで、からだをちじめたり、手足をのばしたり、いろいろやってみた。どんなことをしても、からだはじつと、ちゆうに浮いている。これで肩につばさがはえて

いたら天使そっくりである。ポコちゃんは、いい気になり、すきなことをくりかえして、はねまわる。

カモシカ号は、ポコちゃんから千メートルばかりはなれたところを、ポコちゃんを中心として、ぐるぐると円をかいて、とびまわっていた。なにしろカモシカ号の最低速度は、このへんでも時速五十キロメートルで、かなり早い。

「ポコちゃん、すぐ艇へもどれ」

とつぜん艇から無線電話が発せられた。

「どうしたの、すぐ艇へもどれなんて……」

「たいへんなんだ。むこうから、かなり大きなすい星が、こつちへ近づいて来る。早くこのへんから逃げださないと、すい星に衝突してしまうのだ。ポコちゃん、早く艇へ乗りうつれ」

「それは一大事だ」

なるほど、らんらんと怪^{かいこう}光をはなった大きな酒たるほどのものが、ぐんぐん近づいて来る。これを見てはのんき者のポコちゃんもあわてないではいられない。

艇の中では千ちゃんも顔色をかえている。そして艇を操縦して、ポコちゃんの横手に持

つていく。しかし艇は時速五十キロだから、ポコちゃんの前を猛烈もうれつないきおいでしゅつと通りすぎる。これではポコちゃんは艇の出入口につかまることができない。

それだといって、ぐずぐずしていると、すい星にはねとばされてしまう。すい星はいよいよ近づいたと見え、小山ぐらいの大きさになった。

「おい千ちゃん。乗れやしないよ。こまったね」

「こまったね。よし、艇から長い綱つなをくりだすから、それにつかまるんだ」

千ちゃんは頭のいいところを見せて、出入口から綱をくりだした。それが長い尾を引いてポコちゃんの前を走る。ポコちゃんは死にもぐるいで、この綱にとびついた。とびついたはいいが、とたんにポコちゃんは全身の骨がばらばらになるほどの強い反動を感じ、目が見えなくなった。でも綱は手からはなさなかつた。

千ちゃんの方は一所けんめい、この綱を機械でまきとって、ポコちゃんのからだを艇内に、ひっぱりこんだ。

三つの気密室を、息もたえだえに通りすぎて、二少年がもとの艇内へはいったときには、二人ともすっかり力を使いきって、その場にへたばったまま、起きあがれなかつた。

と、そのおりしも、ものすごい音が艇の後部に起つた。百ひゃくらい雷らいが落ちたようなすごい

音だ。とたんに電燈が消えた。めりめりと艇をひきさく音がする。

「やられたっ。すい星と衝突だ」

「千ちゃん、艇はこわれたらしいね」

二少年を積んだまま、まっくらになったカモシカ号は、どこへともなく落ちていく。

人の顔か花か

二少年は、死にもぐるいの力をふるって、起きあがった。

「千ちゃん、千ちゃん」

「おい、ぼくは、だいじょうぶだ」

「ぼくもだいじょうぶ。早く操縦席へいってみよう」

二人は手さぐりで艇内をはいはじめた。艇内の電燈は消えて、くらやみだが、ただ夜光塗料をぬってある計器の面や、通路の目じるしだけが、けい光色に、ぼうつと弱い光りを

放っている。

「ああ、これはへんだね。呼吸が苦しくなった」

「ぼくもだ。ポコちゃん、艇がこわれて大穴があいたんだよ。そこから空気がどんどん外へもれていくんだ。弱ったね。呼吸ができなければ死んでしまう」

「じゃあ、ぼくは空気帽をぬぐんじやなかった。ぬいだと思ったら、さっきのドカーンだ。だからどこへ空気帽がいったかわからない」

「しゃくだねえ。ここまで来ながら、呼吸ができなくて死ぬなんて……」

「ぼくがわるかった。重力平衡圏で、よけいなことをして遊んで、てまどったのがいけない。千ちゃん、ごめんね」

「そんなことは、あやまらなくてもいいよ。しかし月世界探険のとちゅうで死ぬなんて、ざんねんだ」

「もういいよ。死ぬ方のことは神さま仏さまへおまかせしておこう。それでぼくたちは、それまでのあいだに、できるだけ修理をやってみようじゃないか」

「だめだろう。あと五分生きているか、十分生きているか、もう長いことはないよ。あつ、くるしい」

「千ちゃん、しっかりと、さあ、ぼくが引っぱってやる。とにかく操縦席までいってみよう」
 川上は山ノ井を抱きおこなながら一所けんめい操縦席の方へ通じる、ろうかをはっていった。しかしそれは、かめの子が、はうほどにのろのろしたものであった。艇内の気圧は、すぐく低くなつたらしい。が、生きているあいだの最後の力をふるったために、二十分ほどかかって、ようやく二少年は操縦席にのぼることができた。

そこで二人は助けあつて、スイッチをひねったり、レバーを引っぱったり、ペダルをふんだりして、ありとあらゆる応急処置をこころみた。その結果は……？

「だめだ、発電しない。原子力エンジンの方もとまっている。もう処置なしだ」

山ノ井は、そういつた。がっかりした声である。

「蓄電池ちくでんちの方は？」

「だめ、ぜんぜん電圧がない。……もうだめだ。死ぬのを待つばかりだ」

「そうかね。どうせ死ぬものなら、死ぬまでに後部へいって、どんなにこわれているか見てこよう。いかないか」

「もうだめだ。何をしてもだめだ。ぼくにはよくわかっている」

「ぼくはいつてみる」

めずらしく二少年の意見はわかれた。山ノ井はそのまま操縦席に、ポコちゃんの川上は、またそろそろとはって艇の後部へ。

だが、どこまで不幸なのであろうか。そのとき、まひ性せいのエアテルガスがどこから出て来て二人の肺臓はいぞうへはいつていった。それで、まもなく二人とも知覚ちかくをうしなつて、動かなくなつてしまった。

カモシカ号は、どこへいく？

二少年は、時間のたったの知らなかつたが、それから、やく二十四時間すぎた後のち、二人は前後して、われにかえつた。気がついてみると、明かるい光りが窓からさしこんでいる。呼吸は、たいへん、らくであつた。

「おやおや、これはどうしたんだろう」

ポコちゃんの川上が、大きなあくびをしながら、立ちあがつた。すると、その声に気がついたとみえ、千ちゃんの山ノ井が、操縦席の階段の下からむくりとからだをおこした。「ふしぎだ。重力の場合、いつのまにかもどっている。エンジンはとまっているのに、重力があるとは、おかしい」

足どりは二人ともふらふらであつた。ふらふら同士が、ろうかのまん中でぼったりあつ

て、顔を見あわせた。

「千ちゃん、ぼくたちは、めいどへ来たんだ。しかし、じごくかな。ごくらくだろうか」
「まさかね。でも、わけがわからないや。死んでからも夢を見るのかな。あつ、ポコちゃん、外は明かるいよ。太陽の光りだ」

山ノ井は窓を指さした。と、かれは、びつくりした。

「あ、窓から、だれかこつちをのぞいているじゃないか」
すると川上が答えた。

「あれは人の顔じゃないよ。花だよ」

「花？ 花だろうか。なぜ花が窓の外に見えるのだろう。おいポコちゃん、窓から外を見てみようや」

二人は、息をはずませて、窓ガラスに顔をあてた。二人は、いったい何を見たであろうか。

怪物の顔

窓のむこうにあったものは何か。

それは一言でいうと、夢の国みたいな風景であった。人間の首の二倍もある大きなタンポポみみたいな花がさいている。広い砂原が遠くまでつづき、その上に青い空がかがやいている。人かげは見えない。

「ふうん、いつのまにか着陸しているよ。どうしたというんだろうねえ、千ちゃん」

「ほんとだ、カモシカ号はもう飛行していないんだ。でもよくまあ、いのちにべつじょうがなくて着陸できたもんだね」

「千ちゃん、いったいここはどここの国だい」

「さあ、どこの国か、どこの星なんだか、けんとうがつかないね。ぜったいに地球ではない、といって月世界ともちがう……」

「いやだねえ、きみがわるいね」

「窓をあけて、よく外を見てみようや」

山ノ井がうっかり窓をあけた。と、思いがけない大爆発が、二少年のうしろに起った。

なぜそんな大爆発が起ったのか、考えるひまもない。二少年は気をうしなってしまうた。それからどのくらいたったか、ポコちゃんの川上少年は、ふとわれにかえった。

(痛い、ああ痛い！)

はげしい痛みが、少年をなぐりつける。と、かれの記憶がよみがえりはじめた。

(あつ、どうしたろう、カモシカ号は、爆発したようだったが……)

そのうちに、かれはいま自分が横になつて寝ているのに気がついて、びっくりした。

「おや、なぜぼくは寝ているんだろう……。おうい千ちゃん、どこにいるんだい」

とさけびながら、目をあけようとしたが、あまりにまぶしくて目があききれなかった。

「しずかに……。しずかに……。寝ていなさい。動いてはいけません」

みようにぼやけた声が、川上の耳にはいった。だれかが、かれのからだをおさえつけるのをふりきって上半身を起した。そのときかれは目をあけた。——そのときかれの見た異様な光景こそ、一生忘れられないものとなつた。

「ああつ——」

「もしもし、あなた。こうふんしては、いけません」

「はなしてください。ぼくにさわらないでください——。ぼくは夢を見ているのかしら」

「しずかに寝ていなさい。あなたは、からだをこわしているのだ。しかし心配ありません。われわれがじゆうぶんに手当していきますから」

「夢だ。夢だ。それでなければ、ぼくの目がどうかしてしまったんだ」

川上が見たのは、きみのような顔をした人間——いや、人間でないかも知れない——であった。頭がスイカのように大きくて、そしてひたいははげあがり、頭のとっぺんと両脇に、赤い毛がもじやもじやとはえていた。

ひたいの下には大きな目があった。青いリンゴほどもある大きな目だ。それがぐるぐると、きみわるく動く。

目から下は、顔が急にしなびたように小型になる。ラッキョウをさかさにしたというか、クリをさかさにしたというか、とにかく頭にくらべて小さい。口があるけれど赤んぼうの口のように小さい。鼻ときたら気をつけてよく見ないとわからないほど低くて、やせて小さい。耳は、よく見れば顔の両側についているが、それはすり切れたようで、耳たぶなんか見えない。ぺちやんこになって顔の横についているだけだ。

——と、こう書いてくると、諸君は、おぼけを思いだすかもしれないが、しかしほんとうはそんなものではない。これは、ずっと後にそう思ったことであるが、かれはどこかキ

ユーピーに似ているところが、子どもも子どもしていた。ことに血色がよくて、さくら色で、すきとおるような肌をもっている、そしてつやのある海水着みたいなもので胴のあたりをつつみ、腕や足は、赤んぼうのそのようにふとくみじかく、かわいく、色つやがよく、ぶよぶよしているように見えた。

だが、わがポコちゃんにとつては、この相手はやはり、きみがわるかった。いくらかわいくても美しくても、あたりまえの人間とちがっているので気持がよくなかった。その大きな目玉にみすえられると、ポコちゃんの背すじが氷のようにつめたくなり、ふるぶるとふるえてくるのだった。いったいこの怪物——とっておこう。だってどう見ても人間じゃないんだから——その怪物は何者であろうか。

「気をしずめなさい。起きてはよくない」

その怪物は、ポコちゃんのからだをおさえつける。そのときであった。ポコちゃんは新しいおどろきにぶつかって、まっさおになった。それは、かれのからだをおさえつける怪物の腕が実に三本もあることを、このときになつて発見したからである。

三本腕の怪物——人間ではない！

「き、きみは何者ですか。に、人間じゃありませんね」

ポコちゃんはもつれる舌をむりに動かしてたずねた。さて三本腕の怪物は何と答えるであらうか。

ふしぎな国

ポコちゃんは、まっさおな顔で、歯の根をがたがたいわせて、日ごろのちやめ気もどこへやら、おびえきっているが、あいての怪物は、さくら色のいい血色で、赤んぼうのように明かるい笑顔を見せて、しずかにポコちゃんのからだから手をはなした。

「ぼくのことを、きいているんですね」

怪物は、自分の顔を指さした。その指は、怪物の第三の手についている指だったから、ポコちゃんは、また息がとまりそうになった。右の手を第一、左の手を第二とするなら、のこりの一本が第三の手である。その手は、怪物の首の後からはえている腕の先についていた。その腕は左右の腕とちがい、わりあい細く長かった。そしてゴム管くだみたいにくに

やぐにやしていた。そのような腕の先に、第三の手がついていた。そして手の指は六本あって、どれもみな同じくらいの長さであった。てのひらはずっとせまく、指は長すぎると思うほど長かった。そういう指で、怪物は自分の顔を指さしたのである。

ポコちゃんは、返事をするにも声が出なかつたから、そのかわりに大きくうなずいた。

「ぼくは、人間ですよ」

怪物がそういった。

「いや、きみは人間ではない。そんなふしぎな形をした人間が住んでいるという話を聞いたこともないし、もちろん写真や画で見たこともない」

ポコちゃんは勇気をふるって、異議いぎを申したてた。

「くわしくいうと、ぼくはこの国の人間です」

と怪物はおちついていった。

「川上君。あなたはこの国の人間ではなくて、地球の人間である。そうでしょうが……」

この国の人間と、地球の人間だつて？　そして「川上」などと自分の名を知っているのはなぜだろう。ああ氣持が悪い。たのみに思う千ちゃんは、いったいどこへ行ってしまったのか。

「もしもし、ぼくといっしょに宇宙艇に乗っていた者があつたでしょう。千ちゃんというんですが、どこにいますか」

このだだっぴろい部屋に、ふわりとした白綿の寝床——ねどこ——というよりも、鳥の巣みたいな形の寝床に寝かされているのは自分ひとりであつた。千ちゃんはどこへいったらう。どうしているのかしらん。

「わたくしは知らない」

怪物はそう答えた。川上はいくども千ちゃんのことを説明して、そのゆくえをたずねたが、怪物は知らないとくりかえすばかりであつた。

「わたくしは、きみの健康をりっぱなものにするために、きみについている植物学者のカロチという者だ。きみにつれがあつたかどうか、知らない」

カロチという名の植物学者だつて——と、川上は目を見はつておどろいた。

「……で、ここはどこなんです。月世界でしようか」

月世界にこんな生物が住んでいるはずはないと思ひながらも、とにかくそれをきいてみないではいられなかつた。川上ポコちゃんは、相ついで起る怪奇とふしぎに自分の頭の力に自信がなくなつた。

「ここは月世界ではありません。リラリラ星と名づける遊星ゆうせいの上です」

「リラリラ星ですつて。月世界でも地球でもないんですね。火星でも金星でもないんですか」

「そんなものではない。ジャンガラ星です。ジャンガラ星とは、この国の言葉で、『宇宙の迷子星まいごぼし』という意味です。わかりますか」

「さっぱりわかりませんね。ジャンガラ星なんて遊星があることなんか聞いたこともありません。もちろん宇宙旅行の案内書にも、そんな名は出ていなかった。きみはでたらめをいつてるんじゃないでしょうね」

「でたらめなもんですか。そのしように、きみは、げんにこうしてわがジャンガラ星の上で呼吸をし、ジャンガラ星の人間で、あるわたくしと話をしている。これでわかるでしょう」

「いや、なかなかわかりません」

「じゃあ、きみにわからせるためには、どういうことをしたらいいか……」

「それはこうすればいい。早くぼくを外へつれ出して、ジャンガラ星を案内してください。さあ、すぐ出かけましょう」

「だめです。出かける前に、きみは歩き方から練習しなければならない。でないと大げがをするにきまつている……。出かけるのは、もつともつと先のことです。とうぶん、そこに寝ているがいいです」

そういうと、植物学者カロチは立ち上つて、すたすたと部屋を出ていった。第三の手ではげ頭のとっぺんをごしごしかきながら……。

くしやみ事件

「これが夢でないとすると、たいへんなことになったもんだ」

川上のポコちゃんは、白雲のような寢床の上にひとり取り残されて、ひとりごとをいった。

夢ではない。ほつぺたをつねれば、たしかに痛いし、手で鼻と口をふさぐと息がつまる——。すると、ジャンガラ星とかいう遊星の上にいることはほんとうらしい。

しかしジャンガラ星なんて、全く耳にしたことがない。もしそんなものがあるなら地球上の天体望遠鏡に見えるはずだ。第一、わが太陽系の諸遊星のうちで、空気のあるのは地球と火星だけだといわれているではないか。その他の星には空気がなく、こうして安楽に空気を呼吸してられないはずである。まことにふしぎといわなければならぬ。

「ああわかった。いつのまにか地球へまいもどったんだ。そしてぼくらの友だちが、ぼくをおどかそうと思つて、あんなふうにくユーピーのばけものみたいな仮装をつけて、ぼくをからかっているんだ。それにちがいない……。それに、あのカロチとか名乗る植物学者は、日本語をじょうずに話しているじゃないか。地球以外の星で、いきなり日本語がわかつたり、日本語で話したりするはずがない。そうだ。ここはもとの地球なんだ。この部屋の外には、おおぜいの友だちが、腹をかかえて笑っているんだろう。はははは」

ポコちゃんは、とつぜんそういう結論をこしらえあげた。そしてかれは寢床をけつてはねおきた。

「あれっ」

きみようなことが起つた。それは思いがけないことだった。かれはそんなことをしたつもりではないのに、かれのからだは、すつと上にあがり、足が寢床からはなれて三メートル

ルばかり上へあがった。

それから、からだは、しずかに下りてきて、ふわりと寢床に足がついた。自分のからだ
が、目にははつきり見えながら、からだの中は空気ばかりになったような、きみような身
がるさをおぼえた。

「へんだね、これは……」

ポコちゃんは、小さい目をぼちぼちさせて、からだのまわりを見まわした。べつに風船
がからだについているわけでもない。だれか、自分をそつと引っぱりあげ、そしてふわり
としずかにおろしたわけでもない。

「あつ、この寢床の中に、すてきなスプリングが入っているせいかな」

ポコちゃんは寢床から下りた。そして手で寢床のスプリングをおしてみた。しかしスプ
リングらしいものは、指先にさわらなかつた。

「このへやが、どうもおかしい」

いやに天井てんじょうの高い、まっ白なへやである。出入りの扉が一つあるほかには、画にか
いたようなかたんな窓がいくつかついている。そのほかにはなんにもない。

その窓から、外をみてやろうとポコちゃんは思った。そこでかれは一足二足、窓の方へ

歩き出した。ところが、とたんにかれは足をすべらした。べつにそんなに力を入れたつもりでもないのに、足はつるつると前にすべり、かれのからだは中心をうしなつて、どたと背中を床にぶつけた。そしてからだは、足を上にしたまま、すごい勢いで窓の下のかべの方へすべつて、かべにぶつかつた。

と、かべに足がめりこんだ。いや、からだもいつしよにめりこんだ。いや、そうではない。かべがポコちゃんのからだにおされて、外へ向けて帆のようにふくらんだ。

「うわははは……」

笑つたのではない。恐怖の声をポコちゃんは出したのだ。かたいはずのかべが、まるでゴムの布ぬののようにまがるなんて、これはばけもの屋敷にちがいない。

ポコちゃんは、あわてて起きあがつた。そして戸口の扉をひらいて外へにげ出す決心をした。かれは足をひきながら、戸口の方へすりよつた。

そのとき戸口の扉が外に向かつて、ぱつと開いた。さっきのカロチ教授が、おどろいた顔で部屋へとびこんできた。

だがこのとき、外からの冷たい空気が、ポコちゃんの鼻の穴へ侵入してくすぐつたので、かれはたまらなくなつて、でつかいくしゃみを一つした。

「はつくしよい！」

「ケケツ」

カロチ教授は、きみようなさげび声を戸口にのこすと、そのからだは、あらしにまう紙だこのように、くるくるとはげしくまわりながら、はるかにはるかに遠くへ吹きとばされ、やがて姿は見えなくなった。

思いがけないポコちゃんのくしやみの偉いりよく力ちからだった。

ポコちゃんは戸口にぺったり、しりもちをついたまま、ぽかんとして石のように動かない。何事が起ったのか、ポコちゃんにはさつぱりのみこめないのだ。

なぜ滑すべるのか

「へんだなあ。さつぱり、わけがわからない」

ポコちゃんは、ふしぎそうに、まゆをひそめて、けしとんでいったカロチ教授のゆくえ

を目でさぐってみる。

戸口から見える前方の景色は、はばのひろい白い道が遠くまでつづき、その両側にきみよな林がある。その林は、あたまの重そうな植物のあつまりでできている。その植物は背がずいぶん高く、大きなケヤキの木ほどもある。しかし、ケヤキとはちがい、あんなふとみき太い幹はなく、細くてつやつやした幹がまっすぐに立っている。幹が細いかわりに、葉っぱはたいへん大きく、たたみを三四枚あわせたほどもある。それからこずえの上にも、これまたみ何枚じきはありそうなばけもののような花が咲いているのであった。あぎやかな赤い花、すきとおるような黄いろい花、海をとかしたような青い花などが、そのかたちもいろいろあつて、咲きみだれているのだ。

「へんな林だ。しかし、どこかで見たような気もする景色だ」

そうだ、思いだした。地球の上ならどこにでも見られるあの草花のいを、かりに五十倍か百倍ぐらいに大きくして、それを集めて林にしたら、たぶんこのような景色になるかもしれない。とにかくきみよな景色のジャンガラ星ではある。

「カロチ教授はどうしたのかしらん。これからいつて、あの林の間を通りぬけ、カロチ教授がどうなったか、たずねてみよう」

このきみのような国にとびこんで、きみの悪いったらないが、カロチ教授はふしぎに日本語が通ずるので、どのくらい心強いかしれない。そのくらい頼みに思う教授が、糸の切れただこのようにすつとんでしまつて、いつまでたつても姿をあらわさないのであるから、気になつて、しかたがない。

ポコちゃんは、じゆうぶんに気をつけて起きあがつた。さつきはどうして滑つたのかわからないが、こんどは滑らないようにと用心をして、ゆかの上を一足ふみだした——とたんにかれは、またすつてんころりと滑つてしまつて、そのいきおいで、ゆかの上を氷のかたまりのように滑つて走つて、戸口から外へ……どすん！

たしかに大地の上に、ポコちゃんはしりもちをついた。しかしおしりは、そんなに痛くはなかつた。ふんわりとふとんのうえにしりをおろしたのと同じようであつた。

ポコちゃんは、きよろきよろとあたりを見まわした。空は青く晴れて、高いところにあつた。太陽はぎらぎらと照りつけて熱帯の太陽のようであつた。ふりかえると、今までポコちゃんのいた家があつたが、それは白いクリームでこしらえた、みつバチの巣といったような感じだ。

ポコちゃんは、もう一度じゆうぶんに用心をして腰をあげた。そしてしずかに大地に立

った。そこでしばらく深い呼吸をして、気をしずめた。気がしずまったところで右足を高くあげた。まるで馬が前足をあげたように。それからその足をそつと垂直におろした。そのかつこうは、まるで川をわたるときの足つきそつくりだった。

「あつ、しめた。一足、ちゃんと歩けたぞ」

たった一足だけ滑らないで歩けたことが、ポコちゃんにとっては大きなよろこびだった。そのちようしで、彼は用心ぶかく、つぎの一步をそれからまたつぎの一步を、白い道路の上にあみだしていった。

が、また、すってんころりんと、ころんでしまった。そのわけは、ポコちゃんにはわかっていた。すこしゆだんをして、うっかり大地をけるように足を使ったのがいけなかったのだ。とたんにつるり、すってんころりであった。

「なんという道路だろう。まるで油をぬつてあるように滑っちまう。しかし油なんか、けつしてぬつてないんだがな」

道路を手でなでてみたが、油をぬつたようにぬらぬらはしていないで、やはり大地はがさがさしていた。

「ふしぎだなあ。なぜ、歩くときだけ、滑つてしまうんだろう」

このことは、後になってはつきりわかった。それはこのジャンガラ星は重力が非常に小さい星であるために、まさつ摩擦もまた小さく、したがって地球の上を歩くような力の入れかたをしたのでは、すぐ滑ってしまふのだ。ジャンガラ星はたいへん小さくて月の一万分の一しかないまめつぶほし豆粒星であつたのだ。

そしてついでに書きそえておくが、このジャンガラ星はビー玉のように球形ではなく、乾燥したグリーン・ピースの、おされてすこしいびつになつてゐるそれによく似ていた。そのことがジャンガラ星の宇宙きせう運航の軌道を、いつそう、きみようなものにしてゐるのだつた。

そのことについて、もつとくわしく説明すると——いや、説明は中止だ。なぜとって、今空から一人の人間が、ふりよく浮力を失つたゴム風船みたいに、ふわりふわりと下りて来るではないか。しかもそれはポコちゃんがかんこしてゐるすぐ前に下りてきそうなのだ。どうしたんだらう。あまくだる怪しい人かげは、いったい何者であらうか。

あまくだる人かげ

あまくだる人かげの、みよような姿よ。

ポコちゃんは、それに気がついて、ぽかんと口をあいてあまくだる人かげを見まもっている。
 いる。

「空から人間が降ってくるとは、へんだぞ。翼も生えていないようだし、落下傘を持っているわけではないし、なぜあんなにふわふわと、ゆっくり下りて来られるのかなあ。おや、このへんへ落ちてくるぞ」

まるで花火がうちだした紙製の人形のように、その人かげは風にのっただまま、地面に対してななめにすうつと着陸した。と思つたら、とたんにごろごろと転がりはじめ、約二十メートルを転がって、ちょうどポコちゃんの前まで来た。

ポコちゃんはあわてて相手をつかまえてやった。

「どこか、けがをしなかったかね」

と、相手に声をかけながらよく見ると、なんのこと、それはジャンガラ星人のカロチ教授であつたではないか。

「川上君。くしやみをするときは、こつちを向いてやらないで下さい。わしはもう呼吸がとまるかと思つた。すごいくしやみを君はするんだね」

カロチ教授は、三本の手でしつかりとポコちゃんの腕をつかみながら、うらめしそうにいつた。

聞いているポコちゃんは、顔があつくなくなった。

「あなたを、くしやみでふきとばすつもりはなかつたんです。悪く思わないで下さい。あなたのからだは軽いですね」

「君のくしやみのいきおいがはげしすぎるのだよ。あつという間に、からだがくるくるとまわつて、地上から千メートルも高い空までふきとばされちまつたからねえ。ほんともうこれからは気をつけてくれたまえよ」

「はいはい。気をつけましょう」とポコちゃんはていねいにあやまつた。

「しかしあなたのからだは、どうしてそんなに軽いのですか」

ポコちゃんは、えんりよのない質問をした。

「それは生まれつきだよ。ちょうど、君たち地球人が、いやに重いからだをもっているのと同じことさ」

カロチ教授は、大きな目玉をぐりぐりさせていった。

「なるほどねえ」ポコちゃんほうなずく。

「しかしぼくは、さつきから歩こうとして滑ってばかりいるんです。どうしたわけでしょう」

「そりや君が、あまり足に力を入れて歩くからさ。君はもつと歩き方を練習しなくてはならない。でないと、おもしろいところへ案内できないからねえ」

「なるほど」

ポコちゃんは同じことばをくりかえして、カロチ教授にうなずいてみせた。

「あなたはたいへん親切ですね。カロチ教授。そこでもつとおたずねしてよろしいですか」
「どうぞ。答えられることは答えましょう」

教授もポコちゃんも、道路の上にすわりこんでしまった。タンポポのおぼけみたいな木のかげが長くのびて、かたむいた太陽がぎらぎらと光る。いやに日が短い。

「まず知りたいのは、こんなりっぱな星があるのを、天文学者はなぜ知らないのでしょうか」

「すぐれた天文学者なら、みんな知っているよ、このジャンガラ星のことをね」

「いや、ぼくはジャンガラ星のことを天文学者から聞いたこともないし、本で読んだこともありませんがね」

「そりやわかっている。地球の天文学者たちはみんな天文の知識が低いんだ。だい一このジャンガラ星を見わけけるほどの倍率ばいりつをもった望遠鏡さえ持っていないんだからねえ」

「ははあ、そうですか」

ポコちゃんは顔が赤くなつた。カロチ教授から、地球の学者は、知識が低いなどといわれると、自分まで文化の低い生物といわれたようで、はずかしくなる。

「われわれ地球人よりも、あなたがたの方がずっと知識が進んでいるのですね」

それでもなかるうが、カロチ教授がどう答えるかと思ひ、そう聞いてみた。

「そのとおりだ」教授は、はつきり答えた。

「その証しょうこ拠ことしては、たとえばわしは君たち日本人種の使っている日本語がよくわかるし、またちゃんと日本語で君と話をしている。しかし君はジャンガラ星語は知らない。わしは日本語の外ほか、アメリカ語でもフランス語でも何でもよく話せる。わしだけではない。わがジャンガラ星人なら、みなそうなんだ。われわれは地球人の知能のあまりにも低いのに深く同情する」

「な、なアるほど」

ポコちゃんは小さい目をぐるぐるまわして消えてしまいそうであった。ジャンガラ星人はたしかに地球人類よりずっと高等生物らしい。「人間は万物のれいちょう霊長だ」などと、いばっていたのがはずかしい。

迷子星自伝
まいこほしじでん

カロチ教授が手を貸してくれて、ポコちゃんをささえながら、歩き方をおしえてくれた。そのおかげで、ポコちゃんは、ようやく滑らないで歩けるようになった。

教授は、ポコちゃんに散歩をすすめた。散歩をしながら、知りたいことをたずねてよろしいということだった。

「あなたは、まさか地球へ来られたことはないんでしょうね」

おばけの草花の林にそつて、ポコちゃんは教授と歩きながら、ふとそのことをきいた。

「そうだね、わしが地球旅行をしたのはわずか十四五回ぐらいのもんだ」

「ええっ、なんですって、十四五回も地球へおいでになったんですか」

ポコちゃんは、おどろきのあまり、自分の心臓がとまったように感じた。

「そのうち、日本を通ったのが三回だと記憶している」

「ほんとうですかねえ、失礼ながら、ぼくたちは、そんなニュースを一度も聞いたこともないし、あなたがたが銀座通りを歩いていられる写真を見たこともありませんが……」

「わたしたちは無用に地球人をおどろかしたくないから、いつも地球人には見つからないように用意をしていくんだよ。そしてね、わたしたちは地球をてっとり早く調査していただきたいことはわかってしまったのさ。日本語だって、わしが二時間ばかりかかってすっかり調べあげて来たのさ。それをもととして、ほらこのとおりしゃべれるようになったのさ。わしの日本語の発音はまずいかね」

「いえ、どうしまして。なかなかおじょうずですよ。しかしどうして二時間ぐらいで日本語がすっかりわかっちゃうのかなあ」

「それはね川上君、君たち地球人の低い頭能では説明してあげても、すぐにはわからないだろう。が、ちよつとだけいうとね、地球ではまださっぱり研究に手をつけていないが電

波生理学というものがあって、それを使うとかんたんに行きこなすんだ」

「そうですかねえ」

ポコちゃんは、そういうよりほかなかつた。電波生理学なんて知らない学問だ。

「そうすると、とにかくあなたがジャンガラ星人は、ぼくたち地球人より知能が進んでいるようですが、いったいどうしてそんなにかしこいのですか。あなたがたの方が地球人よりも年代が古いのですか」

「たいして年代が古いわけでもないがね。地球では、今から約七十五万年前に、サルからわかれて猿えんじん人が現れた。その後いろいろな猿人が現れ進化していったが、五十万年たったとき、新しく君たち人類の先祖がその中から現れた。それがだいたい今から二十五万年前だ。そうだったね」

「そうですね」

「ところがわたしたちの先祖は、今から約三十万年前にガラガラ星の上に現れたんだ」

「ガラガラ星ですって」

「そうだ、ガラガラ星だ」

「ジャンガラ星ではないんですか」

「それとはちがう。始めはガラガラ星といって、たいへん大きな地球ぐらいの星だったんだ。ところが今から八千年前にそのガラガラ星は彗星と衝突してこわれちゃった。そのとき砕けた小さな破片が、このジャンガラ星というものになったんだ。ジャンガラ星の大きさは——そうだ。日本の伊豆の大島よりは大きいけど、淡路島よりは小さいくらいだ。豆粒みたいな小さい星だ。そしていまだに宇宙をふらふら迷子になってとびまわっているという、きみのような星なのさ」

カロチ教授の話は、じつにかわった話であった。感心してしまったポコちゃんは、声も出ないで教授の異様な顔を見つめている。その教授は、話をするとき手をさかんに動かす。ことに第三の手——つまり背中からはえている手を、風に吹かれているのぼりのように休みなく頭の上や顔の前に動かして語る。

「それはそれとして、われわれ星人のことだが、今もいったように、われらの先祖は約三十万年前に地上へ姿を現した。君たちより約五万年は早いわけだ。われわれの先祖が出る前は、海にすんでいたんだ。われらの先祖は海からはいあがって、陸上で生活するのを主とするようになった。そのころ、われわれにはこの第三の手が出来ていたんだ。これは背びれから進化して、こんな手になったんだよ」

そういつてカロチ教授は、第三の手を伸び縮みさせながら、おもしろそうに動かしてみせた。そしていった。

「君たちは、こんな便利な手を持っていないので、まことに気のどくだね」

ポコちゃんは、かえすことばもなく、カロチ教授の前にすくんでいる。

いよいよきみようなジャンガラ星である。つぎはどんなことにおどろかされるのだろうか。星人はどこまで人類より高等なのであろうか。ポコちゃんは、どんなめにあうか。千ちゃんはどうしているのか。

すごい計画

ポコちゃんの川上一郎と、ジャンガラ星のカロチ教授とはかたをならべてあるいたが、そのうちに二人は、小高い丘をのぼりきった。そこでポコちゃんは、はじめてお目にかかる、いようなジャンガラ星の風景におどろきの声をあげてしまった。

「やあ、すごいなあ。地平線があんなにまるくまがつてらあ」

なにしろ小さいジャンガラ星のことであるから、丘の上に立つと、星が球^{きゅうけい}形^{けい}になっているのがわかるのだった。りくつから考えるとあたりまえのことだが、じつさいにそれを目で見ると、きみようなながめであった。シャボン玉の上ののっているような気がする。地形^{ちけい}は起伏^{きふく}があり、多くは、れいのタンポポみたいなふしぎな木がむらがつて樹海^{じゅかい}をつくっている。その間に、ハチの巣のような家がてんと散らばっている。おとぎの国へきたアリスのような気がするポコちやんだった。

右手よりに、タンポポの樹海のこずえ越^ごしに巨大なラツパの頭のようなものが大小十何個、ぬつと出ている。まん中にあるものがいちばん太く、そのまわりに並んでいるものは外がわへいくほど細くなっている。ラツパだろうか。いやあんな大きなラツパがあるものか。では、煙突であろうか。煙突にしては、形がへんだし、あんなに一つとところにあつまっている煙突なんて話に聞いたことがない。まるで、キノコがかたまつてはえているように見えるそれは、まぶしく金色に光っている。

「あれは何ですか、カロチ教授」

川上は、そばに立っている教授にきく。

「ああ、あれですか。あれはいま建設中の噴気孔ふんきこうです」

教授は、大きな目玉をぐるっと動かして川上の方をみる。

「噴気孔ですつて。それは何をするものですか。煙突ではないのですか」

「煙突ではない。噴気孔というのは、あそこから強いガスをふきだすのです」

「なんのためにそんなことをするのですか」

ロケットじゃあるまいし、ガスを空へふきあげてどうするのであろうか。むだではないか。

「ロケットというものを知っているでしょう。あれですよ」

教授のことばは意外だ。

「ロケット？ どこにロケットがあるのですか。ロケットの噴気孔なら、空に向いていてはおかしいですね。ロケットの噴気はおしりから出るんだから、あのかたちではロケットは空へとびあがるどころか、ますます大地の中へもぐりこむではありませんか」

「ふふふ」と教授は笑った。

「あれでいいのです。なぜとって、あの噴気孔からガスをふきだせば、このジャンガラ星が前進するのです。おわかりかな」

「ええッ、なんですって」

川上は、おどろいて聞きなおした。

「つまり、このジャンガラ星が自力で宇宙を旅行することができるように、あれをいま取付け中なんですわい。そうでもしないことには、ジャンガラ星はいつまでも月の周囲をぐるぐるまわっている劣等星れつとうせいでがまんしなければならぬ。それでは、われわれはとても満足できないですからね」

教授は、大きな計画を語った。川上はすっかりおどろいてしまった。

「でも……でも、いくら豆つぶみたいな星でも、星を動かすには、たいへんな力があるわけでしょう。その原動力はどうしますか」

「知っているじゃないですか、川上君。原子力というものを使えば、そんなことはわけなくできる」

「ははあ、あなたがたもやっぱり原子力を利用されますかね」

「原子力利用は、われわれ星人の方が地球人類よりも、やく百年前にはじめました」

「百年前ですか。ずいぶん前のことですね」

「いや、百年なんか、ほんの短いものだ。地球人類よりも五万年もさきに生まれたわれわ

れ星人が、原子力を利用することでは、人類よりもわずか百年しか先んじなかつたことを、むしろはずかしいと思いますね」

教授は、地球人類に敬意を示しているようだ。

そのときポコちゃんは、重大なことを思いだした。

「もしもしカロチ教授。ぼくの仲間の千ちゃんを知りませんか、山ノ井君のことですがね。ぼくと一しよにカモシカ号というロケットに乗って、このジャンガラ屋の上に不時着したはずなんです……」

教授はしばらくだまっていた。その末に、つぎのようにこたえた。

「山ノ井は悪い人間だ。かれは、いま追跡されている。まだつかまらない」

なんとという意外な話だろう。ポコちゃんはあきれってしまったて、すぐには口がきけなかつた。なぜ千ちゃんは悪人だと思われているのか。

カモシカ号のさいご

「なぜです。どうしたというんです。千ちゃんはどんな悪いことをしましたか」

ただ山ノ井少年にたよる気持でいっぱいの川上ポコちゃんだった。そのなつかしい友の消息がわかったのはうれしいが、この星人たちから悪人だと思われているとは、なんという残念なことだ。

このジャンガラ星から脱出するには、千ちゃんがいてくれて、二人で力をあわせるのでなければ、とても成功はのぞめない。ことに機械学や天文学のことになると、千ちゃんがくわしいので、ぜひいてもらわないと困る。その千ちゃんが、ジャンガラ星人に追われているとは、なんとということだ。

「ああその……つまり山ノ井なる地球人は、貴重なる多数の生命をうばった、にくむべき凶悪きょうあく犯人はんじんである。しかもいまなお、かれは暴行をはたらいている。かれのためにうばい去られた生命は、ますますふえつつある。……どうです。なんとポコちゃん、あの人間は凶悪なるやつではありませんか」

カロチ教授から聞いた話は、川上にとつてはまったく意外だった。あのおとなしい千ちゃんが、そんなひどい人殺しをするとは、どうしても考えられないのだった。

「ほんとうですか、それは……」

「もう何もかも君に話します。まったくほんとうなのです。悪人山ノ井はとらえられた上、
極刑きよくけいに処しよせられるでしょう」

極刑だつて、極刑といえば死刑だ。ああ、それはたいへん。いちばんの仲よし、そして二人で力をあわせてこの天のはてまで旅をつづけてきたのに……。千ちゃんを死刑台へ送ることはできない。なんとかして助けたいものだ。

「ぼくたちが乗ってきた宇宙艇カモシカ号は、いまどうなっていますか」

川上は、教授のへんじはどうであるかと胸をおどらせた。

「カモシカ号は、空から落ちてくる前から火を発していたが、地上にはげしくつきあたると同時に、すっかり焼けおちましたか」

「ええッ、すっかり焼けおちましたか」

「火が早くて消すことができなかった。きみと山ノ井を救い出すのが、ようやく、まにあつたというわけです」

「山ノ井も救いだされたのですか」

「そうです。しかしかれは、きみのようにけがをしていないから、われわれが救い出すと、

すぐ逃げてしまったのです。林の中へね」

「はあ、そうですか。なぜ逃げたのかな」

「逃げることはないと思います。われわれに感謝をしていいはずですよ。ところが、そのまま逃げてしまった。そして暴行をはじめた」

「どうもわからないなあ。なぜ千ちゃんがそんなことをしたのか」

ひよつとすると、千ちゃんは気が変になったのではあるまいか。川上はそう思って身ぶるいした。

「君たちの乗ってきた乗物の残骸ざんがいは、こっちの方角にあります。あの道を行って丘を二つほど越したところですよ。だいたいいまわれわれが立っているむこうがわになります」

教授の指さしたのは左であった。噴気孔ふんきこうが立っていると九十九度ほどちがう。

「カモシカ号の残骸は、どんなになっていきますか。すこしは形がのこっていますか」

「全体は、平ひらったく地にはりついています。そしてところどころこぶのようにもりあがっていますね。みんなまつ黒こげですよ」

なさけないことを聞くものだと、ポコちゃんは思わずためいきをつく。

「ふうん」

「お気のどくですね」

「カロチ教授。ぼくをそこへ案内してくださいませんか。カモシカ号の残骸をとむらいたいと思いますから」

「よろしい。すぐ行ってみましょう」

「でも遠いのでしょうか。どのくらい時間がかかるんですか」

「そうですね。君がびよんびよんとんでいくなら、三十分もかからないでしょう」

「びよんびよんとんで三十分？」

「そのかわり、きみはわしをいっしょにつれてとんでもありません。そうでないと案内ができない」

「つれてとぶとは、どんなことをするんですか」

「せなかにおんぶしてもらってもいいし、あるいは手をひいて、とんでももらってもいい」

「せなかにあなたをおんぶするのはきみがわるいから——いや、えへん、えへん」とポコちゃんはうつかり口をすべらしたのを、せきをしてごまかし「手をひいてとぶことにしましょう」

川上はカロチ教授の手をとって、いわれるとおりに大地をけってびよんととんだ。する

とあらふしぎ、川上のからだは打上げ花火のようにすうつと空へとびあがった。緑の樹海が足の下をうしろへ走るようだ。やがてからだはだんだんおりてきて、タンポポの林の中に足がついた。

「そら、そこでまたとんだり」

教授がさげんだ。

ポコちゃんは、また一けり、大地をかけた。からだはふたたび空中へまいあがる。なかない気持ちだ。こんどは気がおちついてきたので、うしろをふりかえった。教授がポコちゃんの手をはなすまいといっしょうけんめいにぎって、歯をくいしばってとんでいる。

第三の手が、とばされた帽子のように、あとの方にふきとばされている。

「これはゆかいだ。こんどはもつと高く、うんと遠くまでとんでやろう」

ポコちゃんはまた強く大地をかけた。

樹海じゆかいに土煙つちけむり

そんなことを十四五回くりかえしているうちに、川上と教授は、ジャンガラ星の上をどんどんまわって、やく十キロあまりとんだ。

赤土の沙漠みたいなどころをとびきった。つぎはうすい緑色のまるい大きな葉が地上にはっついて、それに赤い花がついている野原に出た。その野原をとび越すと、こんどは丘がつづき、また元のようなタンポポみたいな樹海となった。

その樹海のまん中から、しきりに煙りがあがっている。

「ちよっとお待ちなさい」

樹海の入口のところの野原で、カロチ教授はポコちゃんの手を強くひつかいた。

「待てとは、なんですか」

「あの土煙りが見えるでしょうねえ。さかんに林の中からたちのぼっているあのすごい土煙りが、きみにも見えるでしょう」

あれなら、ポコちゃんは、さつきから気がついていてる。

「見えますとも。あれはなんですか」

「あそこですよ。悪人山ノ井があばれているのは。あれあれ、さかんに貴重な生命をうば

っている。おそるべき殺害者だ」

「ほう、あそこに山ノ井君がいるんですか」

川上はおどろいて、林の中からあがる土煙りを見なおした。林の中から、土煙りのほかに空の方へ向かってとび出してくるものがある。それこそカロチ教授がいうとおり、貴重なる生命をうばわれた死体の一部分なのであろうか。ばらばらの手足がとび散っているのであろうか。気が変になった千ちゃん、ジャンガラ星人とたたかって、手あたりしだいに相手のからだをひきちぎってなげとばしているのであらうか。川上はどきどきする胸をおさえ、林の上にとびだしてくるものに目をすえた。

（はて、べつに手足のようなものも見えないぞ。星人の首らしいものも見えない。なんだか葉っぱや、えだや、花がちぎれて、とんでいるようだが、殺された星人のからだはちつとも見えないじゃないか）

川上は、そう思って、ふしんの首をひねった。

「あれあれ、あのとおりだ。かわいそうに、ばらばらにひきさかれて、さかんとばされる。ああ、おそろしい」

カロチ教授の大きな目から、涙がぼろぼろとおちる。

「もしもし、カロチ教授」

「おお、なんですか」

「あなたにはばらばらになつてとぶ死骸が見えるのですか。ぼくには何も見えませんです
よ」

「見えない？ そんなことがあるものか。あれあれあれ、あのようにとばされている」

「あれは葉っぱじゃありませんか。花もとんでいますけれども……。あれはみんな植物じやありませんか。ジャンガラ星人の死骸なんかで見えません」

「き、き、きみはへんなことをいう。植物にもちやんと生命がある。あれが暴行でないと、きみはいうのか」

カロチ教授のようすが、急にけわしくなった。川上には、まだ事情がよくのみこめない。「もしもし、教授、気をしっかり持つてください。冷静になってください。あんなことをやっているのが山ノ井君だとしても、山ノ井君はべつに殺人のような悪いことをしているのではない。たかが植物をちよん切つて、なげつけているんじゃないやありませんか。大したことではない」

すると教授は、顔から目玉を半分ばかりとび出させて、身をひいた。はげしいおどろき

にうたれたらしい。

「おお、おそろしい。君も山ノ井におとらぬ悪人だ。植物の生命をとるのが平気だとみえる。そんなおそろしい心の人間にはつきあえない」

教授のことばに、こんどは川上の方がびっくりしてしまった。なんとということだ。ジャンガラ星人は、植物の生命をそんなに重く考えるのか。しかし花の首を一本ちよつと切り落したくらいで極刑になつてはたまらない。どうして山ノ井千ちゃんを救つたものか。ポコちゃんは太こまりであつた。

その間にも、千ちゃんは樹海の中であばれているらしく、いよいよさかんに林の上に葉っぱや花の枝が投げあげられる。

(そうだ。一刻も早く千ちゃんに会つて、植物を切りたおすことをやめさせなければならぬ)

ポコちゃんは、ようやくそこに気がついた。そこで教授に、そうすることを話してしばらくの時間を待つてくれるように頼んだ。しかし教授は、さつきと變つて、もういい顔をしていない。にくしみにみちた目で川上をにらみつける。そこで川上は、しかたなく教授の前をだまつてはなれた。そして一足大地をけると、土煙り、葉煙りのあがる林の中へとんで

いった。

いったい千ちゃんは、なぜそんならんぼうをはたらいているんだろうか。

再会

なつかしい友の姿を、樹海のうちに発見した。しかしその友は、すっかりのぼせあがって、まっかな顔をして、鉄の棒らしいものでまわりの草木をなぎたおしている。それを遠くからとりかこんで、このジャンガラ星^{せいしん}人たちがわいわいさわいである。

かけつけた川上少年は、この場のすさまじいありさまに、何から手をつけたらいいのか、ちよつと迷った。こんなことなら、カロチ教授の手をひっぱって、ここまでとんでくればよかつたと思つた。

さかんにはやしたてる星人たち。みんな怒り^{いか}の絶頂^{ぜつちよう}にあることは、その顔色がエビガニのように赤黒くなっていることによつても知れた。かれらは、だんだんと包圍の陣を

ちじめて、つかれをみせている山ノ井にせまってい。このままでは、たいへんなことになる。川上少年は決心をして、もうひととびとんで、山ノ井のそばへおりた。

「千ちゃん。いったいどうしたんだい」

川上は、山ノ井のうしろへよって、肩をたたいた。山ノ井は、はっと身をちじめ、おそろしそうに、うしろをふりかえった。が、その目はきゆうにかがやいた。

「おおポコちゃん、ポコちゃんじゃないか。それともぼくは夢を見ているのか……」
「夢じゃないよ。ほんとうだよ。ほつぺたをつねつてみな、いたいから」

「待て待て」山ノ井は自分のほおをぎゅつとひねった。

「あいたたた。これはほんとうだぞ。よう、ポコちゃん。よくきみは生きていたね」

「生きているさ。ぼくが死ぬなんてことがあるものか」

「いや、ポコちゃんは死んだんだ。いや、殺されたんだ。殺されたところを、たしかにぼくは見たんだ。それは……」

と、山ノ井がいいかけたとき、ジャンガラ星人たちが、びっくりするほどの近くできみような声を大きくはりあげた。

山ノ井は、その方へけわしい目をむけ、星人たちをぐつとにらみつけた。

「来るなら来い。近よれば、この草や木同様、へし折ってくれるぞ」

山ノ井千ちゃんは、鉄の棒をぶんぶん振りまわして、怒りのかたまりと化^かしている。

「千ちゃん。きみはなぜあの連中とけんかを始めたんだい。そのわけをきかせてくれない」
川上はうしろから声をかけた。

「そのわけかい。そのわけは……」と山ノ井はちよつとことばにつまって、「……ポコちやんが、こうしてぴんぴんして、ぼくのそばへ帰つて来た今となつては、どうもへんなものだね」

「なにがへんなの」

「なにがへんだといつて、つまりぼくはポコちやんを、かれらの手からとりもどそうとして、ひとりでこうして奮闘^{ふんとう}していたんだ。しかし、きみはぶじに帰つて来たんだから、もうべつにけんかをしなくてもいいわけだけれど、なにしろさつきから両方でじゃんじゃんやったことだから、すぐやめるわけにもいかない」

「つまらないよ、そんなこと。すぐよした方がいいよ。それに、けんかなんて、いいことではないからね」

「そりゃわかっている。しかしかれらは、こわれたカモシカ号へずかずかはいって来ると、

大けがをしているきみのからだを手荒くなぐりつけるやら、あのへんな手をきみの口の中へおしこむやら、らんぼうをしやがった。そしてぼくのとめるのをきかずに、大ぜいできみをさらって行ってしまったんだ。ぼくはくやしいやら、腹が立つやらでね、すぐ追っかけようと思ったんだが、カモシカ号墜落つらくのときにひどく腰をぶっつけて痛くて立ちあがれないんだ。それでぐずぐずしているうちに、きみをもっていかれてしまった。ぼくがあげたのは、それから十五分もたった後のことで、きみはどこへさらわれていったのか、さっぱりわからない。くやしかったよ。そのときは……」

「それでわかった。ぼくはそれから連れられて行ってカロチ教授のかいほうをうけ、傷の手あてをしてもらい、命もとりとめたんだ」

「だって、きみはたいへんな傷をしていたよ。ああ、今思いだしてもぞつとする。しかし今見るときみは、そんな大けがをしたようには見えないじゃないか」

「うん。それはね。そのカロチ教授という人がたいへん医学の心得があつて、うまくなおしてくれたんだと思う。なにしろこのジャンガラ星人たちは、ぼくたち地球人類よりもずっとすぐれた科学技術をもっているんで、われわれ人間がびっくりするような、大仕事をかんたんにやってのけるんだ。とてもかなわないや」

「どうもそうらしいところもある。しかし人間とちがうので、どうもつきあいにくいね」
「それでもないよ。カロチ教授なんか、話がよくわかる星人だと思う。そういえば思いだしたが、きみのひょうばんはよくないよ」

「それはよくないだろう。けんかの相手だからね」

「それもそうだが、カロチ教授さえもきみをくんでいたよ。きみが草木を切りたおすのが重い罪悪ざいあくだというんだ」

「えっ、草木を切りたおすのが重い罪悪だつて。そんなわけのわからない話は聞いたことがない。ポコちゃんは聞いたことがあるかい」

「ぼくだつて、もちろん聞いたことなんかありやしない。なぜだろうね」

「きみは、そのカロチ教授に、そのわけを聞いてみなかったのかい」

「うん、聞かなかつた。だつて教授は、そのときたいへんきげんを悪くしていたもんでね」
そういつているとき、カロチ教授が、汗をふきふき林をふみわけて二人の方へ近づいてくるのが見られた。教授が来たせい、星人たちはきゆうにおとなしくなった。しかし安心はならない。

仲なおりの宴^{えん}

カロチ教授をかこんで、山ノ井と川上とはいろいろと話をした。

その結果、二少年と星人との間にもつれていた感^{かんじょう}情がきれいにとけた。それはどつちにとつてもさいわいなことだった。

二少年が意外に感じたのは、このジャンガラ星の上では、植物の生命^{せいめい}というものがひじょうに重く見られていることだった。それは地球の上でいうと、牛や馬、いやそれ以上に値うちのあるものとし、またかわいがらなくてはならないものとされていた。

なお、そのわけについて、カロチ教授は、こんなふうにいっただ。

「見てもわかるでしょう。このジャンガラ星は、せまい上に、食料として大切な植物がほんのわずかしか生えていないのだ。われわれは、この植物をできるだけ大切にあつかい、これからのわれわれの生活をささえなければならぬのです。いや、じっさい植物の補給がじゅうぶんでないために、われわれは近くこのジャンガラ星を運転して、もつとたくさ

んの植物が繁茂はんもしている遊星へ横づけにしたいと思っっている」

二少年が見たところ、植物はそうとうしげっていた。これだけしげっていれば、よろしからうと思うのに、教授はなかなか不足だといったのである。

「おわかりかな。だから山ノ井君が林の中であればさかんに木を切りたおしたでしょう。あれはわが星人たちを恐怖のどんぞこへなげこむとともに、憎悪ぞうおの絶頂へおしあげた。おわかりかな御両人ごりょうじん」

なるほど、それでわけはわかった。しかし、この星人たちが、なぜおびただしい植物を持つていたいと思うのか、その理由がわからなかった。これについて山ノ井は教授につっこんでたずねた。

すると教授は、こんなふうに応えた。

「古いお話をしなければならぬ。われわれジャンガラ星人の先祖は、じつは動物ではなくて植物なんだ。その植物も、陸の上に生えているものではなく、海水の中に発生した一種の海藻かいそうだったんだ。その海藻のあるものが、ふしぎな機会にめぐまれて、自分で動きだした。それからだ。この海藻が、ぐんぐんと高等生物になっていったのは、どうです、聞いていますかね」

教授は大きな目をぐるぐるまわして二少年の顔を見た。

「ああ、聞いていますよ」

「ふしぎな話ですね。あなたがたが植物から出た動物とは？　しかしへんだな、植物はどこまでいっても、植物であり、動物はどこまでいっても、動物でしょう」

ポコちゃんは信じられないという顔だ。

「それはそうです。しかし動物も植物も、これをひつくるめて生物というでしょう。それから動物でも動かないものがあり、また植物でも動くものがあります。地球にあるものというなら、ホヤという動物は、岩の上にとりつくと、一生涯いっしょうがいそこを動かない。それに反して植物のハエトリ草はさかんに動きます。タンポポの実は風に乗ってとぶし、竹の根など、どこまでもものびていく」

「ああ、そうか」

「それから鯨というほにゆう動物どうぶつが、海中にすんで魚のような形になってしまったでしょう。それと似ているが、われわれの先祖の動く海藻はだんだんと魚のような形となり、それから陸上へあがるようになってから、こんどは動物の形に似てきたんです。もちろんそれまでには約四千万年の長い年月がかかった。おわかりかな。だからわれわれは、生活

の上におけるいろいろな点において、今も植物に助けられている。ところがごらんの通り、ジャンガラ星の上には植物がとぼしくて、まことに心細くてならぬ。さあ、そこでわれわれはいよいよ宇宙さすらいの旅に出かけることになったのです。植物の豊富なほかの星を見つげるためにね」

ジャンガラ星人の気のどくな境遇には、ふかく同情された。二少年もできるだけのちえをかすことを申し出た。

その夜は、カモシカ号不時着以来、はじめての、にぎやかな宴会えんかいがひらかれ、星人たちと二少年とは、陽気にさわいで楽しんだ。

だいたんえん
大団円

「いよいよジャンガラ星は自力じりきで宇宙をとぶんだそうだが、いったいどこへ行くつもりだろうか」

その夜ふけ、寝床ねどこにはいった川上少年は、となりに横になっている山ノ井に話しかけた。
「さあ、どこへ行くのかわからないらしい。ほら、カロチ教授がいったろう。宇宙さすらいの旅に出るんだというから、あてはないんだよ」

「あてがないとは心細いねえ」と、川上もいつになく元気がない。

「いつになったら、地球へもどることができのだろう」

「さあ、それもわからない。ジャンガラ星としては、わが太陽系に迷いこんで来てのことだから、わが太陽系なんかみれんはないわけだ。だからわが太陽系にさよならをして、ずっと遠方のほかの太陽系へ行ってしまうかもしれないね」

「それじゃますます地球へもどれなくなるわけだねえ。千ちゃん、なんとかして早く一度だけ地球へ帰ろうじゃないか」

「うん。だがカモシカ号は、あのとおりこわれてしまつて役に立たない。つまりぼくたちはこのジャンガラ星から抜けだすことができないわけさ」

「いやだねえ。何とか、くふうがないものかしらん。……あつ、そうだ。いいことがある。ねえ千ちゃん。カロチ教授を説いて、ジャンガラ星を地球へ着陸させてもらおうや」

「地球へ、この星を。でも、教授はしようちしないだろう」

「うまく話せばわかると思う。つまりわが地球の上には、植物はうんと生えているじゃないか。日本だって原始林があるし、焼けあとのほかはどこへいっても青々している。熱帯なんかへ行くと、まったく草木におおわれてしまつて、植物の世界みたいだ。それを話せば、教授だつて喜ぶよ。第一、ここから地球は近いし、第二に地球の上には植物がうんと生えていることは、ぼくたちが見て知っているのだから——」

「よし、わかつた。それをいつてみよう」

二少年の話はきゆうにきまつて、このことをカロチ教授にあつて、くわしく話をした。

教授は、「それは考えなくてもなかつたが、地球の植物は、われわれの欲しているものとはすこし種類がちがうんだがね」と少ししづつていたが、その日一日よく考えてみると、返事をした。

その翌日、教授はきげんのいい顔で二少年のところへやってきて地球へいくことにきめたといった。アフリカと南米とニューギニアに、自分たちのほしいものがさうとうあるから、それを採取した上で、またつぎの宇宙旅行を考えるのだといった。これを聞いて、二少年はとびあがつて喜んだ。

「しかし心配なことがある。われわれは小さな乗物に乗つてならたびたび、地球へいった

ことがあるが、小なりといえども星を地球の上に着陸させることは一度もやったことがない。ようすによつては、星は着陸させないで、地表から百メートルぐらいのところへ碇ていは泊くさせるかもしれない」

教授はそんなことをいつたが、二少年は地球へ帰れるうれしきで、そんな話を気にとめてもいなかった。

ジャンガラ星が、すごいガスをふきだしてみずから旅行をはじめたときの光景は、ことばにも文章にもつづれないほどの壯観だった。それとともに、巨大なる三基のジャイロスコープがいきおいよくまわり出した。この器械によつて、思うような方向へジャンガラ星を進めることができるわけだった。

こうしてジャンガラ星は、刻一刻地球へ近づいていった。

カモシカ号が不時着をしたときに、無線器械もテレビジョン装置もこわしてしまったことが、二少年にとつてはたいへん残念なことであつた。そのかわりなにか通信機を貸してもらいたいと教授にたのんだが、教授はそれをことわつた。その理由ははっきりしないが、二少年や地球人を警戒したためかもしれない。

事実、地球では大きわぎが始まっていた。とつぜんあやしげなる星がだんだん近づいて来、それはどうしても地球に衝突する軌道をとつていたから。

ジャンガラ星が、地球に対しあと一万メートルの距離に達したときには、地球人のおどろきは一段とたかまり、さわぎであった。ジャンガラ星は、慎重にかまえて、距離千メートル以後は一日に百メートルずつ高度を下げて行き、百メートルの最少距離になると、それ以上近づかない予定であった。また、ジャンガラ星は、だいたい南アメリカのアマゾン川に面した空中に停止する予定であった。ところがこの予定は、はずれてしまった。

ジャンガラ星は三日も早く地球の方へ吸いよせられ、ついには百メートルの最少距離を残すどころか、そのまま南太平洋の海面に接触してしまった。そして接触するやたちまちものすごい爆発を起して、ジャンガラ星は煙とも灰ともつかぬ微粒子びりゆうしとなつて、空をおおってしまった。それは地球全体の空をおおいつくし、太陽の光は色をうしなつてしまったほどであった。これは星と地球の海水との間のすごい摩擦まさつり力りょくでそうなつたものである。

ジャンガラ星は、こうして姿を変えた。地球もめいわくな空中塵くうちゆうじんになやまされなければならなかつた。ある学者は、この空中塵が地球上に氷河時代を出現せしめるであろう

し、そのために人類はみな死滅するであろうと予告したが、じつさいはそれほどのことではなかった。しかし全世界は地上に達する太陽熱が減ったために、それから十年間というものには凶作きょうさくが**つづいた**。おそろしい影響であった。

カロチ教授たちは、みんな死滅しめつしてしまって跡形あとかたもない。川上、山ノ井の二少年だけはさいわいにも一命を拾った。それは二少年は、ジャンガラ星が地球に接触する三時間前に、落下傘らつかさんを作りあげて、ジャンガラ星から脱出し、運よくオーストラリアに着陸することができたためであった。

二少年は、その後元気になってから、めずらしいジャンガラ星の話をして、みんなに喜ばれた。二少年は、そのうちに新しい宇宙艇を手に入れて、またもや宇宙探険に出かけるといっている。そしてまだわれわれの知らない宇宙にすんでいる高等生物に面会し、こんどこそぶじにこの地球へ案内するんだと、たいへん意気いきこんでいる。

青空文庫情報

底本：「海野十三全集 第二巻 四次元漂流」三一書房

1988（昭和63）年12月15日第1版第1刷発行

初出：「少年クラブ」

1947（昭和22）年4月～10月

※「探険」と「探検」の混在は、底本通りにしました。

※「探険家はだれかという」と「千ちゃん」とよばれているが、「の」「」は、底本では、「、」となっています。

入力：tatsuki

校正：浅原庸子

2003年9月5日作成

2005年10月19日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

宇宙の迷子

海野十三

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>